

かみ ざき
上崎地区遺跡

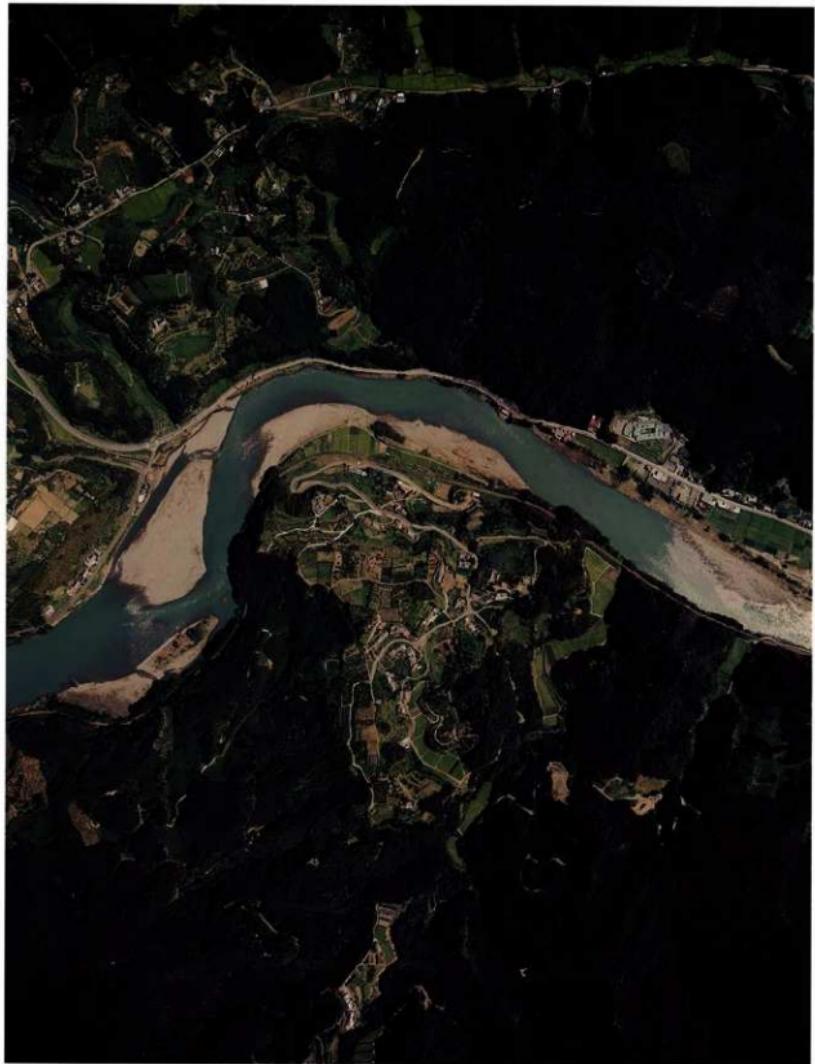
県営農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2008年3月

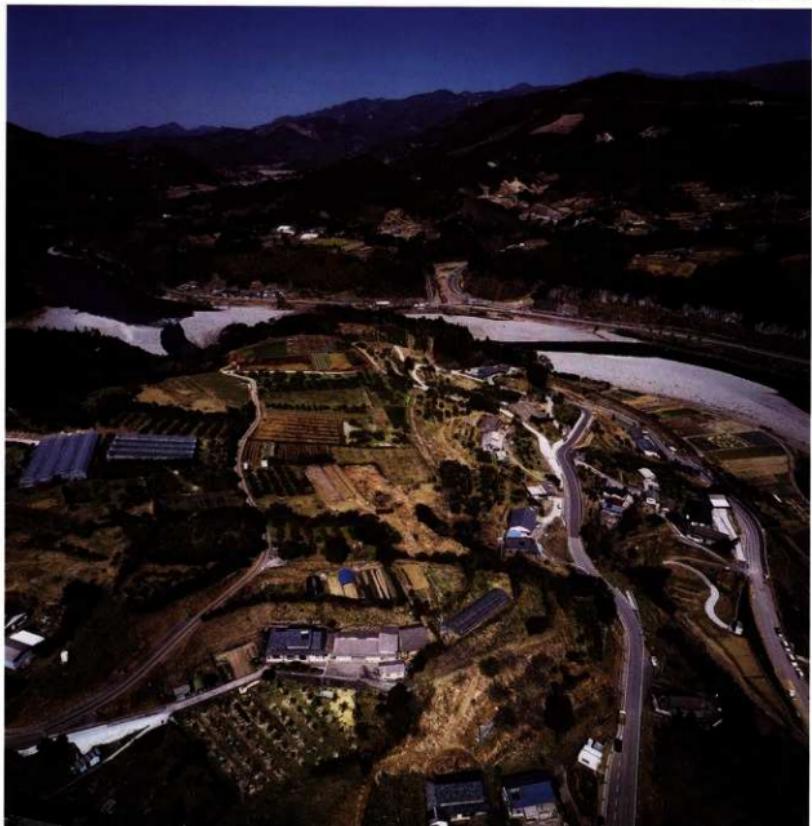
宮崎県延岡市教育委員会

かみ ざき
上崎地区遺跡

県営農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



上嶺地区航空写真（上が北）



上崎地区遺跡空中写真（南東より）



上崎地区遺跡空中写真（北東より）

序

日頃より埋蔵文化財の保護、活用に関しまして深いご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

延岡市教育委員会では、今年度まで東臼杵農林振興局の委託を受けて、北方町上崎地区内に所在する埋蔵文化財調査を実施しました。本書は、その報告書です。

本書の刊行を通して、地域の文化財に対する理解と認識が、ますます深まっていくことを願うとともに、今回の成果が社会教育・学校教育等で広く活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、事業の推進にあたってご協力をいただきました市民の皆様をはじめ、ご指導ご助言をいただきました宮崎県教育委員会文化財課、東臼杵農林振興局、上崎区など関係機関の皆様に対し、こころより感謝申し上げます。

平成20年3月31日

延岡市教育委員会

教育長 町田 訓久

例　　言

1. 本書は、旧北方町教育委員会である平成12年8月1日から、合併後の延岡市教育委員会に引き継いで、平成20年3月19日まで東臼杵農林振興局の委託を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、延岡市教育委員会が主体となり、同北方教育課主査 小野信彦が担当した。
3. 本書に使用した造構・遺物の実測・トレース・図面作成は、小野信彦、阿部有美子、甲斐美智代、佐藤きみゑ、橋本維美、原山洋子、藤本千鳥、森有美が行なった。
4. 現場及び遺物の写真撮影は、小野が行った。
5. 方位は磁北を示し、本書に使用したレベルはすべて海拔高である。
6. 本書の執筆・編集は、小野が行った。
7. 本書で使用した写真・図面については、延岡市教育委員会で保管している。
8. 出土遺物は、延岡市教育委員会にて保管しており、今後展示公開の予定である。

目　　次

I はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 位置と歴史的環境	2
II 調査の内容	
1. 調査の概要	8
2. 基本層序	11
3. 調査区の概要	12
4. 造構と遺物	25
III おわりに	
報告書抄録	60
	72

挿図・表・写真目次

卷頭カラー 1	上崎地区航空写真（上が北）	
卷頭カラー 2	上崎地区空中写真（南東より）	
卷頭カラー 3	上崎地区空中写真（北東より）	
1.	延岡市北方町遺跡分布図 (1/100,000)	4
2.	延岡市北方町遺跡一覧表	5
3.	上崎地区遺跡周辺地形図 (1/30,000)	7
4.	上崎地区遺跡調査一覧表	8
5.	調査区位置図 (1/6,000)	9
6.	上崎地区的文化財位置図 (1/6,000)	10
7.	上崎地区的文化財一覧表	11
8.	調査区位置図 (1/5,000)	13
9.	5区遺構配置図 (1/300)	14
10.	6区遺構配置図 (1/600)	15
11.	1 1 区遺構配置図 (1/200)	16
12.	1 2 区遺構配置図 (1/400)	17
13.	1 4 区（1次調査）遺構配置図 (1/300)	18
14.	1 4 区（1次調査）及び 1 6 区調査区位置図 (1/800)	19
15.	1 4 区（2次調査）遺構配置図 (1/200)	20
16.	1 6 区遺構配置図 (1/300)	21
17.	1 7 区遺構配置図 (1/60)	22
18.	2 3 区遺構配置図 (1/200)	23
19.	検出遺構一覧表	24
20.	旧石器時代出土遺物（石器）実測図 (1/2・2/3)	25
21.	縄文時代早期上坑実測図 (1/30) 及び出土遺物 (1/3・2/3)	26
22.	集石遺構実測図① (1/30)	27
23.	集石遺構実測図② (1/20 (13号集石のみ)、1/30)	28
24.	集石遺構内出土遺物実測図 (1/3)	29
25.	縄文時代晚期土抗実測図① (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/3)	30
26.	縄文時代晚期上坑実測図② (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/3)	31
27.	縄文時代出土遺物実測図① (石器) (2/3)	32
28.	縄文時代出土遺物実測図② (石器) (1/3)	33
29.	縄文時代出土遺物実測図③ (石器) (1/3)	34
30.	縄文時代出土遺物実測図④ (石器) (1/3)	35
31.	縄文時代出土遺物実測図⑤ (石器) (1/3)	36
32.	縄文時代出土遺物実測図⑥ (土器) (1/3)	38
33.	縄文時代出土遺物実測図⑦ (上器) (1/3)	39
34.	縄文時代出土遺物実測図⑧ (上器) (1/3)	40
35.	縄文時代出土遺物実測図⑨ (土器) (1/3)	41

3 6. 縄文時代出土遺物実測図㊪（土器）（1/3）	43
3 7. 1号竪穴住居跡実測図（1/60）及び出土遺物実測図（1/3）	45
3 8. 2号竪穴住居跡実測図（1/30）	46
3 9. 2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	47
4 0. 3号竪穴住居跡実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）	49
4 1. 4号竪穴住居跡実測図（1/30）及び出土遺物実測図（1/3）	50
4 2. 4号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	51
4 3. 5号竪穴住居跡実測図（1/30）及び出土遺物実測図（1/3）	52
4 4. 6号竪穴住居跡実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）	53
4 5. 上坑・焼七集中部実測図（1/20）及び出土遺物実測図（1/3）	54
4 6. 1号七坑及び1号溝実測図（1/20）	55
4 7. 道路遺構空中写真①	55
4 8. 道路遺構空中写真②	55
4 9. その他の遺物実測図（1/3）	56
5 0. 出土遺物観察表①	57
5 1. 出土遺物観察表②	58
5 2. 出土遺物観察表③	59
5 3. 上崎地区航空写真（昭和23年米軍撮影）	61
5 4. 事前健康指導の様子	61
5 5. 中学生体験学習	61
5 6. 5区空中写真	62
5 7. 11区空中写真	62
5 8. 13区空中写真	63
5 9. 14区空中写真	63
6 0. 16区空中写真	64
6 1. 上崎地区空中写真（北より）	64
6 2. 遺物出土状況（5区・西より）	65
6 3. 遺物出土状況（11区・北東より）	65
6 4. 遺物出土状況（14区1次調査・南より）	65
6 5. 集石遺構検出状況（14区1次調査・北より）	65
6 6. 集石遺構検出状況（14区2次調査・西より）	65
6 7. 13号集石遺構検出状況（16区・西より）	65
6 8. 遺構検出状況（13区・東より）	66
6 9. 遺構検出状況（23区・東より）	66
7 0. 1号土坑検出状況（5区・南より）	66
7 1. 5号土坑検出状況（14区・北西より）	66
7 2. 7号土坑検出状況（23区・南東より）	66
7 3. 2号焼土集中部検出状況（11区・東より）	66
7 4. 2号竪穴住居跡検出状況（11区・東より）	67
7 5. 5号竪穴住居跡検出状況（17区・東より）	67
7 6. 4号竪穴住居跡検出状況（14区・東より）	67

7 7. 作業状況（1 4 区 1 次調査・北東より）	67
7 8. 諸塚往還検出状況（1 3 区・北より）	67
7 9. 五ヶ瀬川河原・礫の堆積状況（南西より）	67
8 0. 出土遺物（1～1 5）	68
8 1. 出土遺物（1 6～2 1）	68
8 2. 出土遺物（2 2～4 3）	68
8 3. 出土遺物（4 4～5 4）	68
8 4. 山上遺物（5 5～6 3）	68
8 5. 出土遺物（6 4～6 6）	68
8 6. 出土遺物（6 7～8 3）	69
8 7. 山上遺物（8 4～9 9）	69
8 8. 出土遺物（1 0 0～1 1 3）	69
8 9. 出土遺物（1 1 4～1 3 5）	69
9 0. 出土遺物（1 3 6～1 5 1）	69
9 1. 出土遺物（1 5 2～1 5 8）	69
9 2. 山上遺物（1 5 6）	70
9 3. 出土遺物（1 5 9～1 6 9）	70
9 4. 出土遺物（1 6 5・1 7 0～1 7 2）	70
9 5. 出土遺物（1 7 3～1 8 2）	70
9 6. 出土遺物（1 8 3）	71
9 7. 出土遺物（1 8 4～1 8 8）	71
9 8. 出土遺物（1 8 9～1 9 2）	71
9 9. 出土遺物（1 9 3～1 9 8）	71
1 0 0. 出土遺物（1 9 9～2 0 0）	71
1 0 1. 土器復元状況	71

I . はじめに

1. 調査に至る経緯

上崎地区遺跡は、延岡市北方町上崎辰地区で行われている農地保全整備事業等に伴って発掘された遺跡の総称である。

東臼杵農林振興局では、事業最終年度に当たる本年度も上崎地区において農地保全整備事業を計画し、工事予定地内の埋蔵文化財についての照会を、平成19年4月9日付けで延岡市教育委員会を行った。

工事予定地内的一部は、昨年度の確認調査をうけて本調査をすることになっていたが、新たな工事ヶ所については改めて確認調査を行なった結果、遺跡と判断されなかつたためそのまま工事実施となつた。

今年度の本調査は、8月5日から10月12日にかけて実施し、引き続き整理作業及び報告書作成作業に入った。

発掘調査報告書作成作業は、困難を極めた。平成17年9月6日に宮崎県に大きな被害をもたらした台風14号により、五ヶ瀬川が氾濫し庁舎1階が完全に水没、その後しばらく災害復旧作業に追われた。上崎地区遺跡関係では、書類・遺物も一部被害を受け、整理作業室を会議室として利用する為に資料を小学校の空き教室や民俗資料収蔵庫に積み込んだため、関係図面・写真・遺物等の復元にも時間がかかった。

しかし、合併により延岡市の資料整理室を間借りすることができ、上崎地区遺跡以外の資料については、廃園になった市の幼稚園施設跡に移動して整理スペースを確保した。また、図面整理や図面の縮小コピー等電気設備が整った作業室を確保してから比較的スムーズに進んだ。

発掘調査は、当初農林振興局と旧北方町農政課より提示された条件を基に行なっていたため、調査面積も過大で期間も十分ではなかったが、合併後は十分な打合せの元に行なうことができた。平成12年度から今年度まで行なった調査は、以下のとおりである。(国庫補助事業に伴う試掘・確認調査は除く。)

1次調査	平成12年8月1日～平成13年3月20日	1,800 m ²
2次調査	平成13年8月1日～平成14年3月20日	1,860 m ²
3次調査	平成15年1月15日～平成15年3月20日	980 m ²
4次調査	平成15年9月1日～平成16年3月19日	835 m ²
5次調査	平成16年7月30日～平成17年2月25日	835 m ²
6次調査	平成17年12月26日～平成18年2月15日	300 m ²
7次調査	平成19年1月19日～平成19年3月16日	200 m ²
8次調査	平成19年8月7日～平成20年3月21日	200 m ²

上崎地区遺跡では、8年間にわたって24ヶ所の調査(国庫補助事業を含む)を実施してきた。それぞれの調査について、詳細に報告しなければいけないのであるが、期間・紙幅等の関係で遺構を検出した調査区を中心に報告している。遺物は、包含層や遺構に伴うものの中から主なものを取り上げた。一括資料、その他の遺物は、特徴的なものを取り上げた。

また、同地区では、個人の農地改良T・事や農・林道・市道(旧町道)拡幅T・事に伴つての事前調査を行い、多くの成果を得ている。これは、県営農地保全整備事業に伴う調査による文化財保護啓発意識が、広く上崎地区に浸透したことでも大きく影響している。

当地区的発掘調査事業は、文化財保護の観点から言えば、調査後に工事に先立つて現地説明会等を実施し公開しなければいけないのが本来の姿であるが、T・事期間の関係で、7次調査でようやく中学生の職場体験学習による発掘体験を行なつた以外は実施していない。

2. 調査の組織

調査の組織は、以下の通りである。

調査主体	北方町教育委員会（平成18年2月19日まで）
教育長	河野達也（～平成14年6月30日）
	中 利幸（平成14年7月1日～）
社会教育課長	高見和嗣郎（平成12年度）
	危長 鎧（平成13年度～平成15年度）
	甲斐 淳一（平成16年度）
	緒方 尚志（平成17年度）
庶務担当	課長補佐
	藤田 純三（平成12～平成15年度）
	甲斐 克則（平成16年度）
	鬼塚 重敏（平成17年度）
調査担当	文化財係長
	小野 信彦

調査主体	延岡市教育委員会（平成18年2月20日～）
教育長	牧野 卓久（～平成19年9月30日）
	町田 訓久（平成19年10月1日～）
教育部長	山良 公明
文化課長	渡邊 博吏
北方教育課長	緒方 尚志（～平成19年3月31日）
	大村 望（平成20年4月1日～）
文化課課長補佐 (兼文化財係長)	九鬼 勉（～平成19年3月31日）
文化課課長補佐	大島 紀世子（平成19年4月1日～）
北方教育課長補佐	鬼塚 重敏
文化課文化財係長	赤星 清次
庶務担当	文化課文化振興係主任主事
	松岡 直子
調査担当	北方教育課社会教育係長
調査指導	春田 清子
調査協力	北方教育課社会教育係主査
	小野 信彦
	宮崎県文化財課
	宮崎県東臼杵農林振興局農地整備課、宮崎県埋蔵文化財センター、 宮崎県総合博物館、宮崎県立西都原考古博物館、宮崎県市町村埋 蔵文化財担当者、農地保全整備事業上嶺地区推進協議会及び地元 関係各位

3. 位置と歴史的環境

本遺跡が所在する延岡市北方町は、宮崎県の北部に位置し、南は門川町・美郷町北郷区、西は西臼杵郡日之影町、北は大分県佐伯市と境を接する。南部を九州山地に源を発する五ヶ瀬川が流れる。北には1,000m級の大崩山・鬼の目山などの山々が連なる。町域面積のほぼ89%を山林が占める農林業主体の町であるが、平成18年2月20日をもって延岡市と合併することとなった。

南部の五ヶ瀬川流域や曾木川流域には、阿蘇溶結凝灰岩の台地や河岸段丘が発達しており、遺跡の大部分が集中する。

旧石器時代の遺跡には、AT層下位より石核等が出土した矢野原遺跡や半船底型細石核と降帯上に爪形文を施した土器が共伴して出土した岩土原遺跡がある。特に矢野原遺跡では、AT層上位より疊群の外、ナイフ形石器や剥片尖頭器を含め約3,000点にも及ぶ遺物が出土している。AT層下位では、数点のスクレイパーと剥片が出土している。石材は水晶、流紋岩、砂岩等である。

縄文時代早期では、矢野原遺跡、藤田遺跡等で押型文土器・集石遺構が、曾木原遺跡で連続土坑が検出されている。前期では笠下原遺跡で轟B式土器・曾畠土器等が、中期では笠下遺跡等で船元式土器がしている。笠下原遺跡では、集石遺構も検出されている。後期では皆原洞穴で鎌ヶ崎式土器等が、晩期では南久保山小堀町遺跡、川水流遺跡等で黒色磨研土器が出土している。

弥生時代では、昭和28年に北方町から板付II式土器と思われる上器片が採集されて、宮崎大学に保管されている。後期初頭になると表採品であるが、瀬戸内系上器の移入が見られる。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡が、笠下遺跡、藤田遺跡、打扇遺跡、早口渡遺跡等で検出されている。遺物には、甕・壺・高坏・ミニュチュア土器・石庖丁等がある。

古墳時代では、後期の箱式石棺が矢野原・駿小屋・後曾木等で発見されている。昭和12年に県指定史跡となった『北方村古墳』も、後期箱式石棺群の一つである。

奈良・平安期では、速日峰地区遺跡や南久保山小堀町遺跡等で、若干の遺物が出土している程度である。中世になると、町内各地で六地蔵や五輪塔等が散見される。中世山城跡として、藤田城や仲畑城があるが、地名などからまだ多くの山城が存在するものと思われる。笠下遺跡、速日峰地区遺跡等では祭祀遺構が検出され、備前焼のすり鉢や明鏡等が出土している。

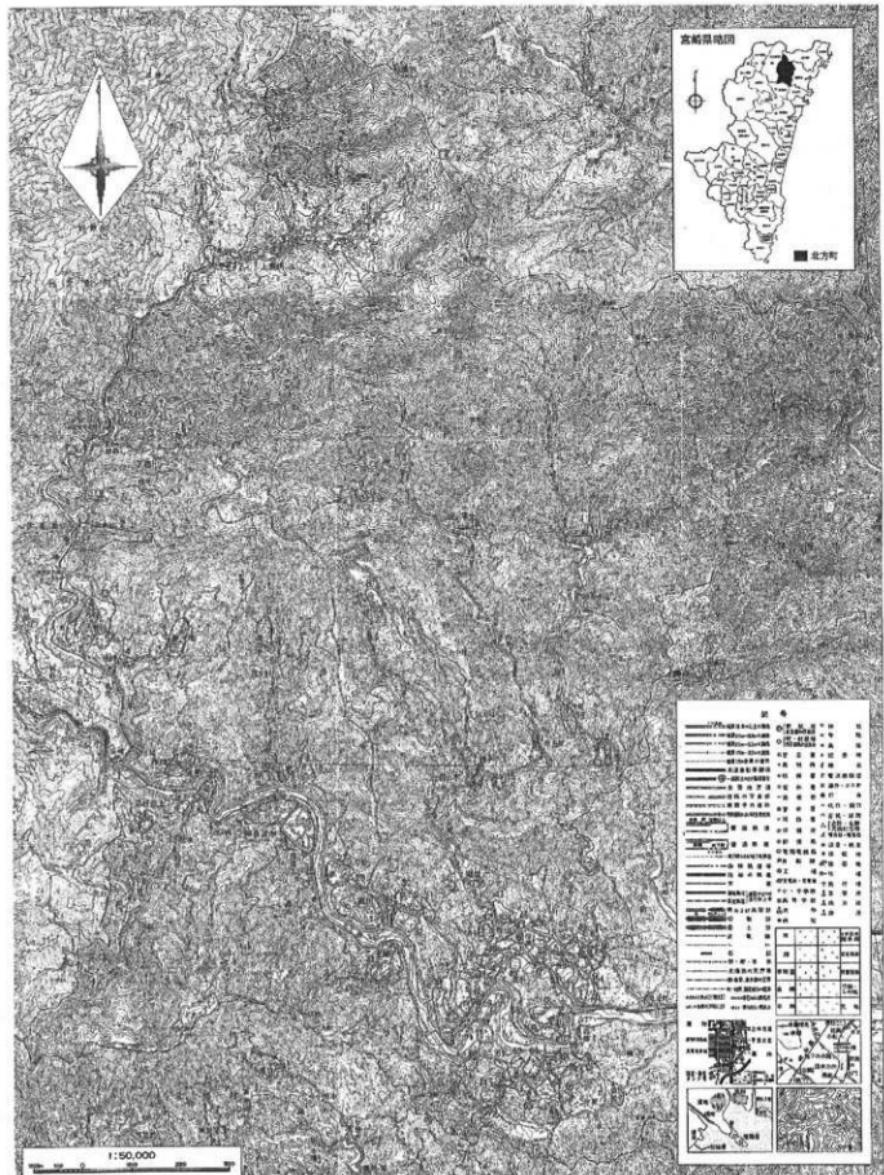
近世は延岡藩領となり、木炭生産や鉱山開発が盛んに行われ、明治新政府へと引き継がれた。

江戸時代から明治時代にかけて、北方地区では日平鉱山をはじめ猿渡鉱山、横峰鉱山等の鉱山開発が積極的に行われた。特に、三菱に経営権が移ってからの横峰鉱山は、明治33年(1900)以降に発電所建設や技術革新が積極的に行われ、格段の活況を呈した。鉱山の販賣は、北方地区の生産基盤になるなど、経済的効果はもちろん文化面での影響も多大なものがあった。

昭和42年(1967)に鉱山が閉山すると産業構造も大きく変化し、現在では、国指定史跡である比叡山・矢筈岳をはじめとする自然景観のすばらしさを生かした登山・ロッククライミング、キャンプ、溪流を利用したヤマメの養殖、スキー場・風力発電等を兼ね備えた総合レジャー施設ETO LAND速日峰等の観光資源にも力を入れている。

平成18年2月20日、北方町・北浦町は延岡市と合併し、19年3月31日には北川町とも合併して九州で2番目に広い市域を有する新生延岡市となった。

市域の拡大とともに交通網も着々と整備されつつあり、より一層の交流が深まることによって今後更なる発展が期待できる。



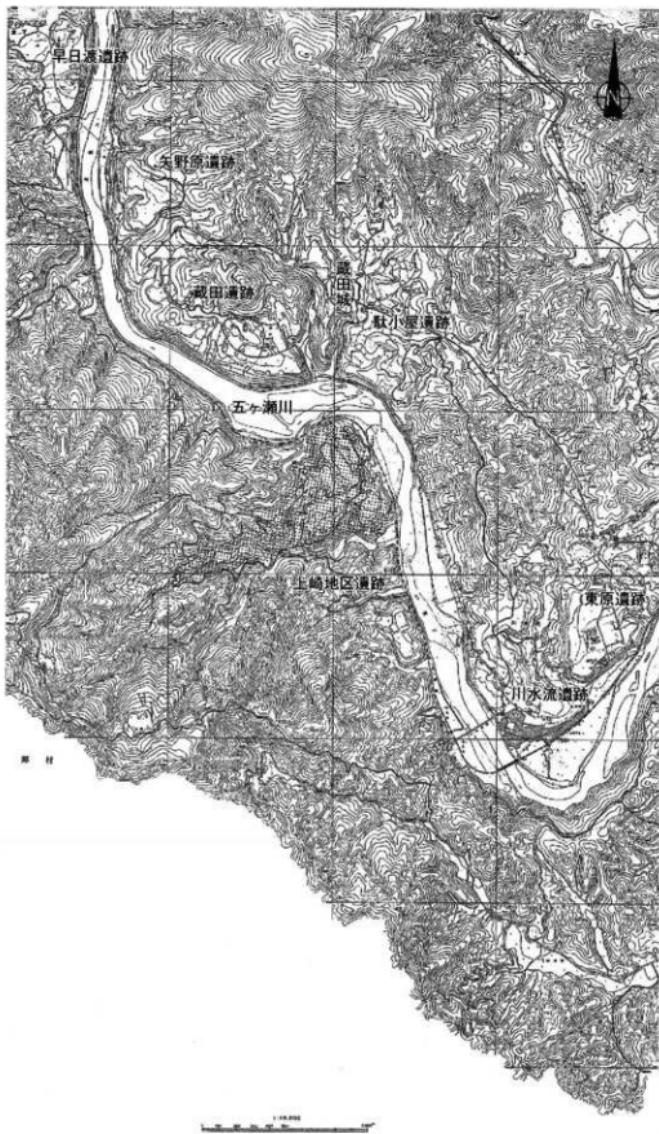
1. 延岡市北方町遺跡分布図 (1 / 100,000)

番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	備 考
1	上鹿川東の内遺跡	上鹿川(東)の内	散布地	縄文～近世	一部日之影町側に分布が広がる
2	比叡山	菅原	指定期名称		日之影町矢ヶ岳と合わせて指定
3	菅原洞穴・菅原廻跡	菅原	散布地・洞穴遺跡	旧石器～中世	昭和41年南九州短大により調査
4	横峰遺跡	横峰本	散布地	縄文～近代	武山跡
5	美々地遺跡	美々地末	散布地	縄文～中世	中世山城の可能性
6	三ヶ村内の内遺跡	三ヶ村(桑の木)午	散布地	中世～近世	備前焼のすり鉢と多量の古鏡が出土
7	三ヶ村内の口遺跡	三ヶ村(内)の口)午	散布地	山世～近世	
8	上中尾遺跡	藤の木(上中尾)酉	散布地	口世～近世	和銅5兩と銅鏡2枚が出土
9	大保下遺跡	板上(大保下)亥	散布地	中世～近世	
10	石上遺跡	板上(上)亥	散布地	中世～近世	
11	二段上遺跡	二段(二段上)戌	散布地	口世～近世	
12	庄立遺跡	庄立(庄立)亥	散布地	中世～近世	
13	庄原遺跡	庄原(庄原)亥	散布地	縄文～中世	平成4年確認調査、一部消滅
14	尼形原遺跡	板下(尼形原)戌	散布地	縄文～中世	
15	板ヶ平遺跡	板下(板ヶ平)戌	散布地	縄文～中世	
16	小原遺跡	板下(小原)戌	集落跡	縄文～中世	平成5年確認調査、一部消滅
17	藤の木桑木水道遺跡	藤の木(桑木水道)酉	集落跡	縄文～中世	平成5年確認調査、一部消滅
18	尾弘遺跡	八坂(尾弘)午	散布地	中世～近世	
19	八坂遺跡	八坂(尾弘)午	集落跡	弥生～近世	
20	松舟遺跡	八坂(松舟)午	散布地	中世～近世	
21	椎屋遺跡	椎屋亥	散布地	縄文～近世	多木遺跡(旧名)を変更
22	城遺跡	草上(城)巳	中世山城	縄文～近世	山城の大部分は削半されている
23	久保遺跡	早上(久保)巳	散布地	縄文～近世	
24	荒平遺跡	早上(荒平)巳	散布地	縄文～近世	
25	打扇遺跡	早中(打扇)巳	集落跡	口石器～近世	平成2年～12年調査、一部保存
26	早日波遺跡	早日波巳	集落跡	口石器～近世	平成2年～12年調査、一部保存
27	矢野原遺跡	岐戸(矢野原)辰	集落跡	口石器～近世	平成5年調査、一部消滅
28	蘿田遺跡	蘿田辰	集落跡	口石器～近世	昭和62年～平成5年調査、一部消滅
29	嵐山城	嵐山(嵐山)辰	中世山城	中世	場等が良好に残る
30	駒小屋遺跡	駒州(駒小屋)辰	散布地	旧石器～近世	
31	地山遺跡	底田(地山)辰	散布地	縄文～近世	平成9年調査、一部消滅
32	戸の上遺跡	戸田(戸の上)	散布地・石棺群	旧石器～近世	石棺群は消滅
33	上崎地区遺跡	上崎辰	集落跡	旧石器～近世	平成12年度～19年度まで調査、一部消滅
34	船木谷遺跡	難越(船木)子	散布地	縄文～近世	
35	難越遺跡	難越子	散布地	縄文～近世	
36	川水流遺跡	川水流卯	集落跡	旧石器～近世	中世山城の可能性、一部消滅
37	東原遺跡	川水流(東原)卯	散布地	旧石器～近世	一部消滅
38	南久保山小堀町遺跡	南久保山(小堀町)子	集落跡	口石器～近世	
39	十郎ヶ尾遺跡	南久保山(十郎ヶ尾)子	散布地	縄文～近世	部消滅
40	櫻瀬遺跡	曾木(櫻瀬)子	散布地	縄文～近世	
41	北久保山遺跡	北久保山子	散布地	縄文～近世	
42	猪俣遺跡	難越(猪俣)子	集落跡	縄文～近世	一部消滅
43	上畠遺跡	難越(上畠)子	散布地・中世山城	縄文～中世	西南戦争時に再利用
44	仲桜城跡	難越(仲桜)子	中世山城	中世	場等が残る
45	仲桜遺跡	難越(仲桜)子	散布地	縄文～近世	
46	若丁経造跡	曾木(若丁経)子	石井群	古墳	県指定北方村古墳1号墳
47	後曾木遺跡	曾木(後曾木)子	散布地・石棺群	古墳	県指定北方村古墳3号墳
48	笠原遺跡	曾木(笠原)子	散布地	縄文～近世	
49	若谷道遺跡	曾木(若谷)子	散布地	縄文～近世	一部消滅
50	曾木原遺跡	曾木(曾木原)子	散布地	旧石器～近世	一部消滅
51	深谷原遺跡	曾木(深谷)子	散布地	旧石器～近世	一部消滅
52	古城遺跡	曾木(古城)子	散布地・中世山城	旧石器～近世	一部消滅
53	中野遺跡	曾木(中野)子	散布地	縄文～近世	一部消滅
54	馬田山遺跡	曾木(馬田)子	散布地	縄文～近世	
55	梯現原遺跡	角田(梯現原)丑	散布地	縄文～近世	一部消滅
56	角田遺跡	角田(中世)丑	散布地・中世山城	縄文～近世	
57	角田上ノ原遺跡	角田(上ノ原)未	散布地	縄文～近世	上屋敷・下屋敷・垣内の地名が残る
58	足鷲遺跡	角田(足鷲)丑	散布地	縄文～近世	
59	下崎遺跡	角田(下崎)丑	散布地	縄文～近世	
60	中山遺跡	川水流(中山)寅	散布地	縄文～近世	消滅
61	上田下遺跡	笠下(上田下)寅	散布地	縄文～近世	一部消滅
62	岩土北平廻跡	笠下(岩土北平)寅	散布地	旧石器～近世	
63	岩土原遺跡	笠下(竹土原)寅	散布地	旧石器～近世	昭和44年南九州短大により調査
64	笠下廻跡	笠下(原)寅	散布地	縄文～近世	一部消滅
65	松尾原遺跡	笠下(松尾原)寅	散布地	旧石器～近世	
66	藤木谷遺跡	笠下(藤木谷)寅	散布地	旧石器～近世	
67	伊木原遺跡	笠下(伊木原)寅	散布地	旧石器～近世	
68	炭ノ塚遺跡	笠下(炭ノ塚)寅	集落跡	旧石器～近世	
69	笠下下原遺跡	笠下(下原)寅	散布地	旧石器～近世	原は通称名
70	笠下黒原遺跡	笠下(黒原)寅	散布地	旧石器～近世	一部消滅
71	笠下山口原遺跡	笠下(山口原)寅	散布地	旧石器～近世	一部消滅
72	笠下(ゴルフ場)遺跡	笠下(ゴルフ場)寅	集落跡	旧石器～近世	一部消滅

2. 延岡市北方町遺跡一覧表

引用・参考文献

1. 田中茂『東臼杵郡北方村先史遺物地名録』北方村教育委員会 昭和34年(1959)
2. 田中茂『東臼杵郡北方村の古墳』北方村教育委員会 昭和37年(1962)
3. 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会『日本の洞穴遺跡』平凡社 昭45年(1970)
4. 鈴木重治「本邦における土器起源に関する研究—岩土原遺跡の調査を中心に」
『南九州大学園芸学部研究報告』第3号・別刷 南九州大学園芸学部 昭和48年(1973)
5. 北方町史編纂委員会『北方町史』北方町役場 昭和47年(1972)
6. 宮崎県教育委員会『宮崎県の文化財』昭和52年(1977)
7. 北方町教育委員会『北方町あの村この里』—古老が語る今と昔— 昭和55年(1980)
8. 江坂輝弥・芹沢長介・坂詰秀一編『日本考古学小事典』ニューサイエンス社 昭和58年(1983)
9. 角川書店『角川 日本地名大辞典』45 宮崎県 昭和61年(1986)
10. 北方町教育委員会『笠下遺跡』『北方町文化財報告書』1(1986)
11. 北方町文化財保護審議会『北方町の古跡を訪ねて』 平成元年(1989)
12. 宮崎県『宮崎県史』資料編考古1 ぎょうせい 平成元年(1989)
13. 北方町教育委員会『横峰鉱山史』 平成4年(1992)
14. 宮崎県『宮崎県史』資料編考古2 ぎょうせい 平成元年(1989)
15. 宮崎県『宮崎県史』資料編近世2 ぎょうせい 平成元年(1989)
16. 松村明監修『大辞泉』 小学館 平成7年(1995)
17. 宮崎県教育委員会「打扇遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・藏田遺跡」『一般国道218号線バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1995)
18. 平凡社『宮崎県の地名』—日本歴史地名体系46巻 平成9年(1997)
19. 北方町史第2巻編纂委員会『北方町史第2巻』北方町役場 平成11年(1999)
20. 延岡市教育委員会『延岡の史跡と文化財』発行年不明
21. 宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書I』平成10年(1998)
22. 宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書II』平成11年(1999)
23. 北方町教育委員会「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書』23(2004)



3. 上崎地区遺跡周辺地形図 (1 / 30,000)

II . 調査の内容

1. 調査の概要

木遺跡が所在する上崎地区は、標高 868m の速日峰から派生した尾根の端部に位置し、「原」「上ノ原」と呼ばれる阿蘇溶結凝灰岩で形成された台地上あるいは傾斜地を利用して果樹（みかんやもも・なし等）の栽培が盛んである。このため、多くの調査区は包含層下の地山部分まで削平を受けていた。また、工事の多くが排水路工事等によりアカホヤ火山灰層をやや削る程度の軽微なもののが多かったため、遺構の検出は少なく、遺物も埋土中に含まれる一括資料のほうが、発掘調査で出土するものを上回っている状況である。

農地保全整備事業に伴って発掘調査を行なった 24 ヶ所の内、多くの制限を受けた調査であったためか、遺構が検出された調査区は 8 ヶ所に過ぎない。しかし、これまで同地区において地元有志等による表面採集でいくつかの遺跡が知られている以外、本格的な埋蔵文化財調査は皆無であったことを考えると、剥片尖頭器の出土、縄文時代早期の集石遺構や弥生・古墳時代の堅穴住居跡の検出例は一定の成果といえよう。

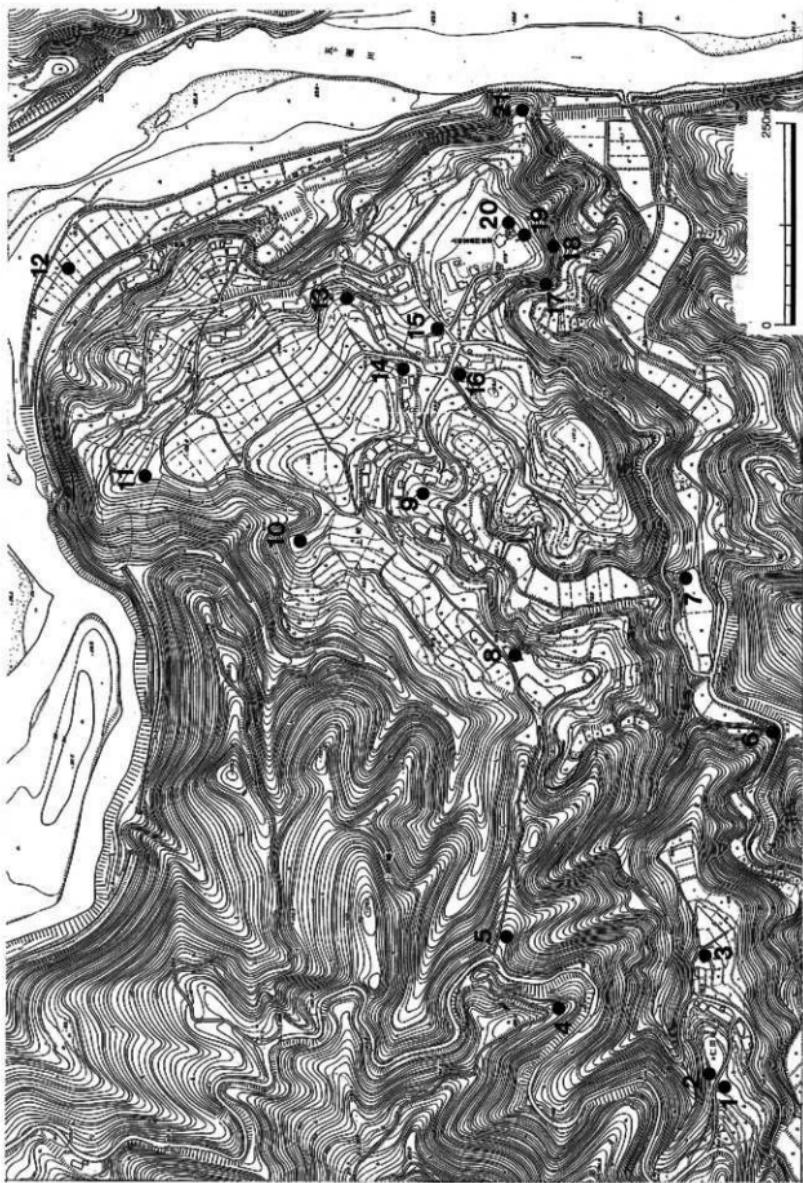
また、県営農地保全に伴う発掘調査事業の影響により、他の開発（個人農地改良事業、市道・農道・林道改良事業）に伴う事前の照会が行われるなど、文化財保護に関する啓発効果は十分に現れている。

調査区	調査年度	檢出遺構	出土遺物	備考
1	18	なし	なし	
2	18	なし	なし	
3	13	なし	なし	
4	13	なし	なし	
5	18	土坑	石器・土器	
6	12	堅穴住居跡・燒土集中部	石器・土器	堅穴住居跡は一部のみ調査
7	12	なし	石器・土器	
8	13	なし	石器・土器	
9	14	なし	石器・土器	
10	17	なし	石器・土器	
11	19	堅穴住居跡・土坑・燒土集中部	石器・土器	堅穴住居跡は一部のみ調査
12	14	なし	なし	
13	14	堅穴住居跡・土坑・道路遺構	石器・土器	道路遺構は謹塚住湯の一部
14	14・15	堅穴住居跡・土坑・集石遺構	石器・土器	堅穴住居跡・土坑・集石遺構は一部のみ調査
15	14	なし	なし	
16	15	なし	石器・土器	
17	17	堅穴住居跡	石器・土器	堅穴住居跡は一部のみ検出
18	14	なし	石器・土器	
19	19	なし	石器・土器	アカホヤ火山灰層が良好に残る
20	17	なし	石器・土器	周辺で遺物表層（個人集）
21	14	なし	なし	
22	14	なし	なし	
23	12	堅穴住居跡・土坑・溝	石器・土器	堅穴住居跡・土坑・集石遺構は一部のみ調査
24	12	なし	空手通宝	

4. 上崎地区遺跡調査一覧表



5. 調査区位置図 (1 / 6,000)



6. 上崎地区の文化財位置図 (1 / 6,000)

2. 基本層序

上嶠地区遺跡の基本層序は、ほぼ以下の通りである。工事の都合で、VI層上面までの調査がほとんどである。五ヶ瀬川流域の阿蘇溶結凝灰岩台地の上では、この層序で比較的安定している。上鹿川東の内遺跡や二ヶ村遺跡などの山間部や支流の上・中流部では、阿蘇溶結凝灰岩関係の地層が発達せず、四万十帯の砂岩層あるいは花崗斑岩の岩盤の上に薄い包含層が見られる。

I層…表土層（約20cm）

II層…茶褐色土層（約20cm）

III層…黒色土層。パサつく。（約30cm）一部を除き削平されている。上部より主に縄文時代晩期の遺物や須恵器・陶磁器等が出土。畑作地域では、一部を除き削平されている。

IV層…アカホヤ層（約20cm）上鹿川などの山間部でも、比較的安定した堆積が見られる。遺跡によっては、前期・中期の遺物が内部より出土する。

V層…黒褐色土層（約20cm）やや粘質。縄文時代早期の遺構と遺物が山上。住居跡の検出は無く、ほとんどが集石遺構である。最近では、連結土坑の検出例も増えている。

VI層…黄褐色土層（約20cm）粘質。旧石器時代の遺物が出土。堆積が良好な遺跡では、AT層までに、黒褐色土層や黄褐色土層が交互に見られる。

VII層…AT層（約10cm）今回の事業に伴う調査では、検出できなかった。五ヶ瀬川北部の矢野原遺跡や慈眼寺靈苑遺跡などでは比較的安定した堆積が見られる。

VIII層…黒褐色土層（約20cm～50cm）今回の事業に伴う調査では、検出できなかった。3～5cmのブロック状を呈する。矢野原遺跡で県教育委員会が行った中位の埋上分析の結果、
 $24,290 \pm 680$ (22,340B.C.) という数値が得られている。

IX層…黄茶褐色土層、粘質。小砂利を含む。上部で石器が出土する遺跡の調査例が県北地域で見られるようになった。

X層…阿蘇溶結凝灰岩層。岩盤。山間部では、四万十帯の砂岩あるいは花崗岩・花崗斑岩が岩盤を形成している。

番号	名 称	説 明	番号	名 称	説 明
1	寺跡	延岡市南町にある寺念寺が以前あったといわれる。	12	青面金剛像	文政6年(1823)の銘がある。足元に額の姿が2面彫られてる。
2	五輪塔群	1. にあったものを移す。 2. 文久3年(1863)塔の地蔵塚と「から移された五輪塔	13	高寺	—
3	石塔群	がある。	14	水神	詳細不明
4	石塔群	時刻不詳の弘法大師像がある。	15	上崎庚申塚群	6基の庚申塔が並められている。
5	馬頭観音	天保11年(1840)の銘あり。	16	石塔	無銘。詳細は不明。
6	山の神	年号不明。	17	細箭	防空壕建設で移動。洞の中に祀られている。
7	土塹出土地	十連(土で作った網の重り)が出土。付近に遺跡の存在が予想される。	18	庚申塔	以前埋れていたのを掘り出して祀っている。
8	中西石和鉢	石棺があったといわれる。現在、所在不明。	19	薬師堂	觀音菩薩像・薬師如來像・大師像の三体が祀られている。觀音菩薩像に文化12年(1815)の銘がある。
9	水神	道路沿線時に消滅。石塔のみ移動。	20	上嶠天満神社	祭神は菅原道真など四神。以前『原』と『山原』にあつたものを合祀した。例祭日は12月7日である。
10	古樹跡	明治10年(1877)に起きた西南戦争時の台構断。塗が残る。	21	木神	現在行方不明。
11	古墓跡	10と同じ。塗は消滅。			

7. 上嶠地区遺跡の文化財一覧表

3. 調査区の概要

遺構が検出された 5 区、6 区、11 区、13 区、14 区、16 区、17 区、23 区を中心と報告する。

5 区では、時期不明の土坑が 1 基検出された。道路の山側部分は地山まで削平されていたが、谷側において削平を免れて包含層が残っている部分があり、縄文時代早期の遺物が若干出土した。また、道路作成時に削った時の土を埋土に利用しているが、埋土中にもチャートの剥片や縄文土器・弥生土器等が見られる。

6 区では、尾根が内側に傾斜する中腹部に位置するところで堅穴住居跡の一部を検出した。その外に、焼土の集中部分を 1 基検出したが、掘り込みは見られない。調査区内の包含層からの出土遺物も多くない。尾根の端部や裾部ではなく、中腹の僅かな平坦部を利用した堅穴住居跡を形成する事例である。類例は、五ヶ瀬川の上流に位置する打扇遺跡などでも見られる。

11 区は、標高 100~120m 程の通称「原」と呼ばれる台地上に位置し、上峰地区でも一番広い平坦地域である。また、遺物集中部が見られる数少ない調査地点である。堅穴住居跡を 1 軒、十坑を 1 基、焼土集中部を 1 基検出している。堅穴住居跡は、検出面積から床面まで 80 cm 程で比較的深めの堅穴住居跡である。

13 区も、「原」と呼ばれる台地上に位置し、以前から石礫等が採集されていた。五ヶ瀬川からの比高差は 60~80m である。アカホヤ層が確認され、上面で堅穴住居跡 1 軒や道路遺構を検出した。轍の跡と阿蘇溶結凝灰岩を削って整形した道路遺構は、最近舗装された農道以前に利用されていたもので、曾木から高千穂に向かう高千穂往還から分かれ諸塙に向かう「諸塙往還」の一部である。また、縄文時代早期と晩期の上坑を各 1 基ずつ検出した。

14 区も「原」台地の一部である。普段から地元住民による生活道路として利用されており、周辺に寄せられた遺物から包含層が良好に残ると予想されたため、調査期間を道路横の部分を 1 次調査、道路部分を 2 次調査として行った。台地の下辺部を走る道路部分は地形的なものから発掘調査は工事立案にして、地元利用者に負担がかからないようにした。調査の結果、集石遺構 12 基や土坑 1 基・堅穴住居跡 1 軒を検出している。

16 区は、「原」の台地が北側の五ヶ瀬川に向かって下降する端部に位置している。集石遺構 1 基と十坑 1 基を検出している。また、倒木痕と思われる土坑内 3 ケ所より縄文時代早期から弥生・古墳時代の遺物が混在して出土している。

17 区は、水兼農道工事に伴い調査した 16 区に直角にあたる形で排水路建設が予定され、これに伴って調査した。80 cm 程の調査幅ながら堅穴住居跡を 1 軒検出した。検査面から床面までの深さは山側で 60 cm、五ヶ瀬川側で 30 cm を測る。

23 区は「原」の台地が東側、五ヶ瀬川に向かって下降する端部に位置している。堅穴住居跡を 1 軒と縄文時代晩期の土坑 1 基、時期不明の溝を 1 基検出した。出土遺物は多くない。

24 区の各調査区とも工事の規模と耕作の影響等の状況から、遺構を完掘した事例は多くない。遺構が検出できたのも、水兼農道や現道の改良に伴う比較的広めの幅を調査した事例で、11 区の排水路関係は、極めて稀な調査例である。各調査区ともに制限の多い調査で、多くの遺構が一部しか調査できなく、その成果は十分ではない。反面、調査例がほとんどなかった当地域において、遠日峰地区遺跡や矢野原遺跡、藏田遺跡、笠下ゴルフ場遺跡と言った北方地区を代表する遺跡に共通するような縄文時代早期の集石遺構、弥生・古墳時代の堅穴住居跡を確認でき、これまでの調査空白地帯を埋める結果となった。



8. 調査区位図 (1 / 5,000)

5区の概要

速日峰（868m）から東へ派生する尾根の端部、標高90~100m程の台地南西端に位置している。

現況は作業道であるため、遺跡は畠部分のみに残っているのみと予想したが、傾斜部分に包含層が確認され、縄文時代早期の土器・石器が出土している。

検出遺構

調査区の北西で土坑を1基検出した。阿蘇溶結凝灰岩の風化した地層面に掘り込まれている。楕円形を呈し、埋土には焼土と炭を含んでいる。遺物はないため、時期については不明である。

出土遺物

チャートや砂岩・流紋岩製の剥片や縄文時代早期の土器片、弥生・古墳時代の土器片が出土している。

遺物の量は多くない。

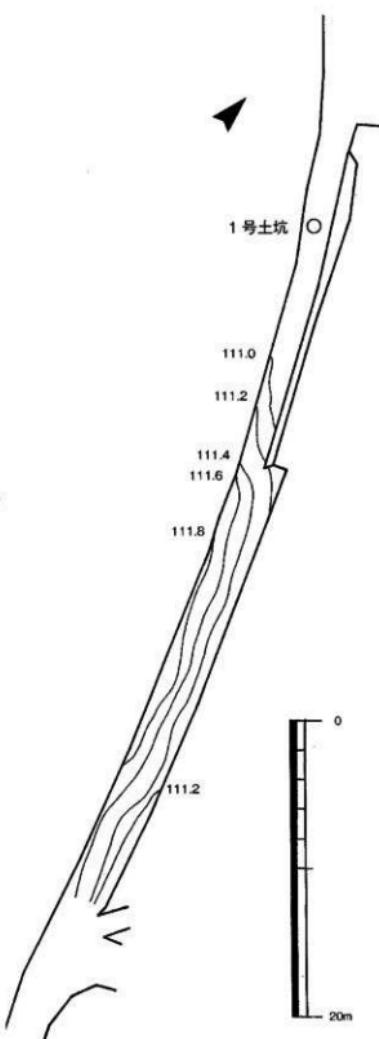
まとめ

調査区の北西側のがけ面で、谷に向かって地崩れが発生したと思われる痕跡を確認した。かなり煩雑に地崩れが発生したようである。

断面観察の結果、埋土中に遺物の発見はなかったものの、焼けた砂岩礫を認めた。

道路部分の埋土中にもかなりの焼けた礫が含まれていた。

周辺の開発には、十分注意する必要がある。



9. 5区遺構配図 (1/300)

6区の概要

5区の反対側、尾根が内側に傾斜する中腹部に位置する。

かなりな傾斜地にもかかわらず、包含層が良好に残るもの遺物の量は多くない。

現況は作業道であるため、復旧後の利用も考え考へて上手部分を残して調査を行った。

縄文時代早期の土器・石器が出上している。

検出遺構

調査区の中央部分で竪穴住居跡を1軒と調査区の南端部分で焼土集中部を1基検出した。竪穴住居跡は一部分の調査のため詳細は不明である。付属施設としてベッド状遺構がある。床面は平坦で、主柱穴等に関しては不明である。いずれも小破片であるが、弥生・古墳時代の土器片が出上している。

焼土集中部は掘り込みがなく、傾斜部に浅く堆積する程度である。遺物はなく、時期については不明である。

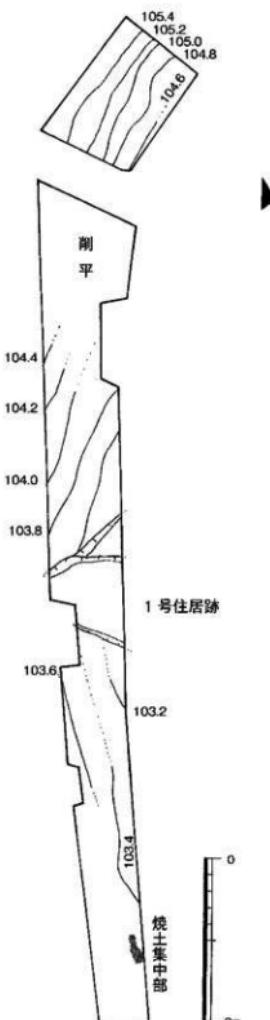
出土遺物

チャート製の剥片や縄文時代早期の土器片、弥生・古墳時代の土器片が出上している。

遺物の量は多くない。

まとめ

5区で調査した斜面のわずかな平坦部を利用して竪穴住居跡を営む事例が、少しずつではあるが増えている。県北地域の五ヶ瀬川中流域の集落の一端を感じるようで興味深い。周辺部の状況はどうなのか、開発等には十分注意しなければならない。



10. 6 区遺構配置図 (1 / 600)

11区の概要

5・6区に比べて比較的安定した平坦部の台地上に位置している。北東側の五ヶ瀬川に向かって緩やかに傾斜する。「原」台地は、包含層も地形同様に比較的安定している。

調査区の北側はビニールハウスの排水パイプ工事により包含層のほとんどが削平されていた。

検出遺構

調査区の南側部分で竪穴住居を1軒と焼土集中部を、調査区の南端部分で土坑を1基検出した。

竪穴住居跡は一部分の調査のため詳細は不明である。付属施設としてベッド状遺構がある。床面は平坦で、主柱穴等に関して不明である。凝灰岩の板状礫を壁に埋め込んだ、棚状のものが検出されている。出土遺物には、弥生・古墳時代の甕等がある。炭化物の分析で、 1710 ± 40 YBP の年代が出ている。

焼土集中部は掘り込みが深く、焼土も10cmの厚みがある。底は2段になっている。竪穴住居跡と同じ時期の遺物が出土している。炭化物の分析で、 1770 ± 40 YBP の年代が出ている。

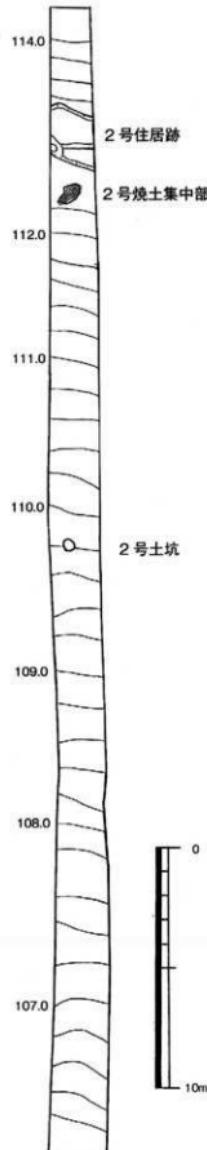
出土遺物

縄文時代早期の土器・石器が多く出土した。遺構に伴って、弥生・古墳時代土器・石器も充実している。

まとめ

周辺では、上崎地区一の立地条件が生かされ、縄文時代早期の集石遺構・連結土坑、弥生・古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。

今回の調査地域外、あるいは調査区の間にも遺構の存在が予想される為、開発等には十分注意しなければならない。



11. 11区遺構配置図 (1 / 200)

13区の概要

「原」台地の北西側に位置している。調査区の北端から五ヶ瀬川に向かって急激に傾斜していく。

果樹園の造成によりかなり削平を受けているが、削平を逃れた部分から竪穴住居跡等を検出している。

柱穴も検出したが、調査区の制限から掘立柱建物復元できていない。現在は、大きく迂回する緩やかな傾斜の農道が利用されているが、以前には13区を利用して諸塚へ物資を運んでいたという。荷車の轍と思われる凹部と阿蘇溶結凝灰岩の岩盤を削って作った道の跡「諸塚往還」を確認した。

検出遺構

調査区の中央部分で竪穴住居を1軒と近接して縄文時代晚期の土坑を1基、時期不明の柱穴を若干、調査区南側で縄文時代早期の土坑を1基、中・近世期から現在まで使用したと思われる諸塚往還の一部を検出した。

出土遺物

縄文時代早期の上器・石器が多く出土した。

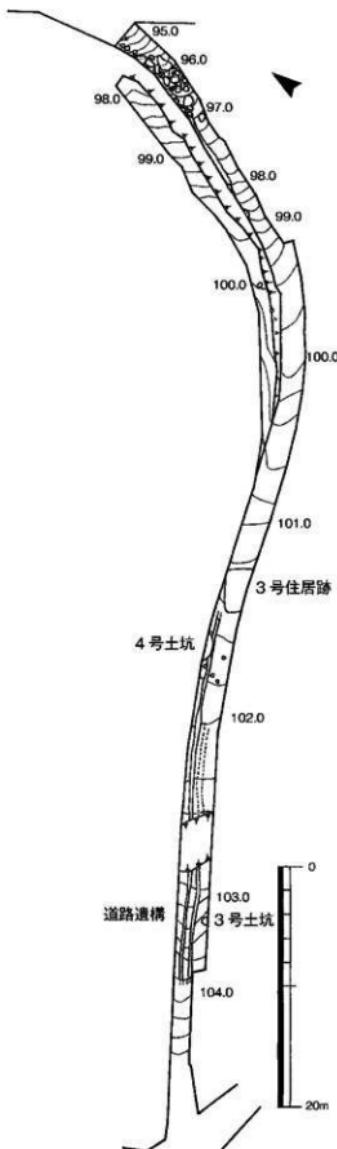
遺構に伴って、縄文時代早期の石巒・環状石斧、縄文時代晚期の石器・土器、弥生・古墳時代の土器・石器が出土している。

まとめ

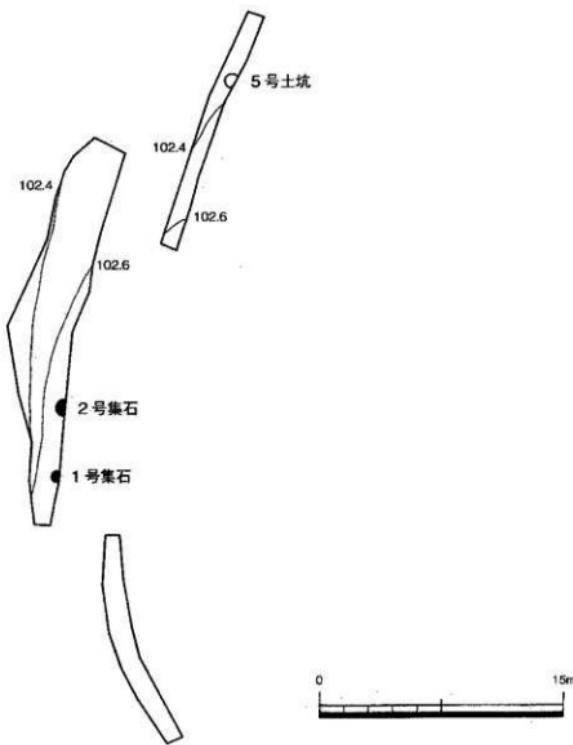
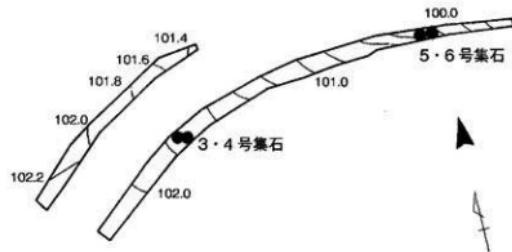
諸塚往還は、当初、城・滝下の船着場を発着としていたが、取り扱う産物の量が増加した為、次第に上崎や川水流、笠下へと分散して運ぶようになったといわれている。検出した諸塚往還は、阿蘇溶結凝灰岩の岩盤をかなり削り、勾配も工夫されており、工事量からその重要度が推察される。

幸いコンクリートで固められたものの大きく改変されずに残ることになった。

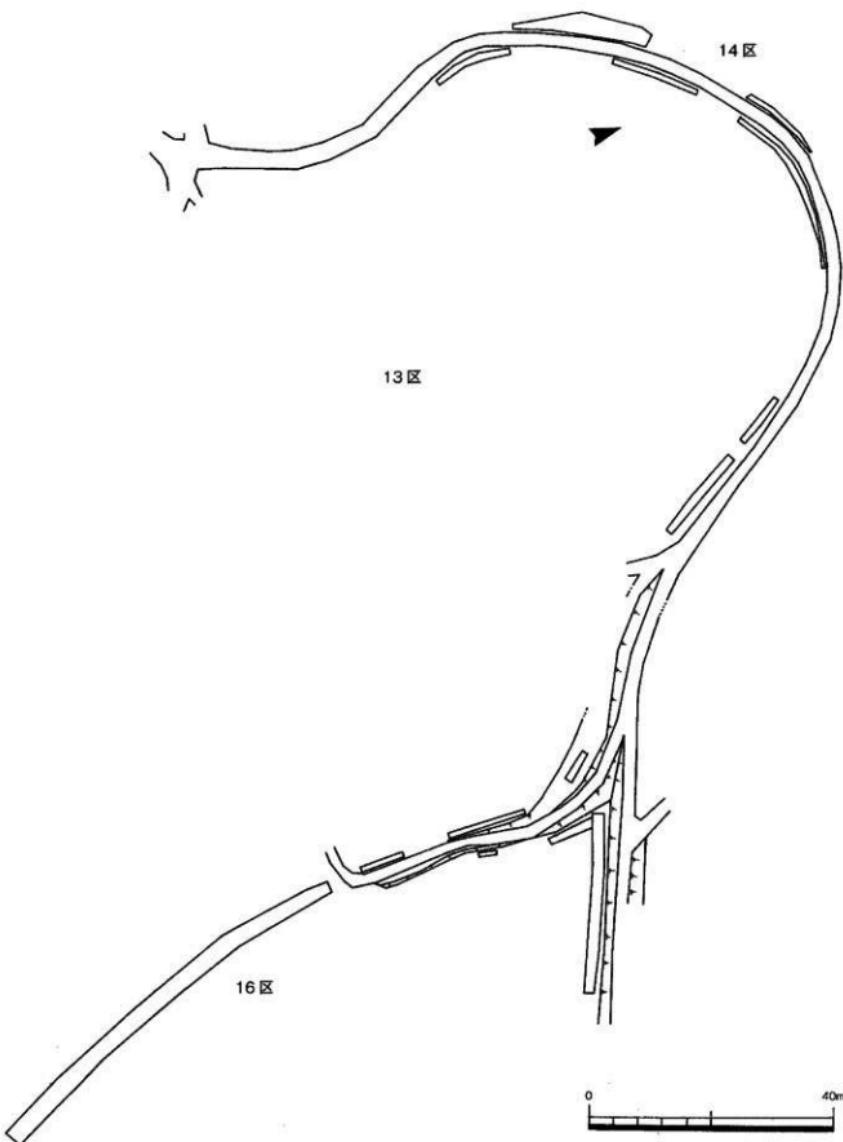
今後、こういった遺構にも目を向けて記録保存を図る必要がある。



12. 13区遺構配置図 (1 / 400)



13. 14区(1次調査) 遺構配置図(1/300)



14. 14区(1次調査)及び16区調査区位置図(1/800)

14区の概要

「原」台地の北西側の端部付近に位置している。
調査区の北東端から五ヶ瀬川に向かって急激に傾斜
していく。

地域住民の生活・作業用道路として使用頻度が高
いため、交通の便と工事への迅速な移行を考慮して
道路の横を中心に行った1次調査と、道路部分のみ
の調査を行った2次調査の2カ年に分けて調査を実
施した。道路開設関係によるものか、コンクリート
を剥ぐとすぐに縄文時代早期の集石遺構を検出した。

また、人為改変を受けていたが、竪穴住居跡を1
軒検出した。

検出遺構

縄文時代早期の集石遺構12基、V層下面から掘り
込まれた土坑1基、弥生・古墳時代の竪穴住居跡1軒
を検出した。

出土遺物

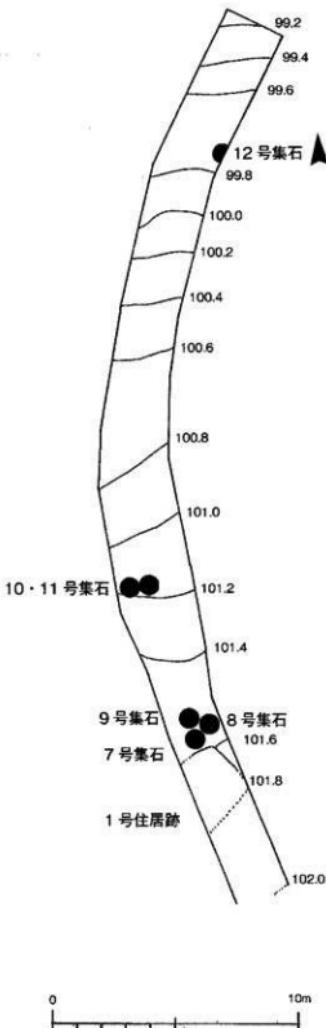
縄文時代早期の上器・石器が多く出土した。
遺構に伴って、弥生・古墳時代の上器・石器が出土
している。
旧石器時代の包含層から、流紋岩製の剥片が若干
出土した。

まとめ

地域へ配慮した調査ではあったが、遺構の一環し
た調査という観点では無理があった。地元に配慮し
つつ、調査に伴う十分な期間を以下に確保してください。
今後に残された課題である。

また、道路幅だけではなく、工事車両に絡んだ付
帯工事にも関心を払う必要がある。

竪穴住居跡は、木の根による影響からか壁の立ち
上がりが不明瞭で、踏み固められた床面がなくなっ
たところを竪穴住居跡の範囲としている。



15. 14区(2次調査)遺構配置図(1/200),

16区の概要

「原」台地の北東側の端部付近に位置している。調査区の北東端から五ヶ瀬川に向かって急激に傾斜していく。

アカホヤ火山灰層の堆積も良好であるが、一部を除き、V層までの調査を行っていない。

検出遺構

縄文時代早期の集石遺構1基と弥生・古墳時代の土坑1基を検出した。その他、倒木痕と思われる土坑を検出した。内部には、縄文時代早期から古墳時代までの遺物が混在している。

出土遺物

旧石器時代及び縄文時代早期の包含層から若干の遺物が出土した。

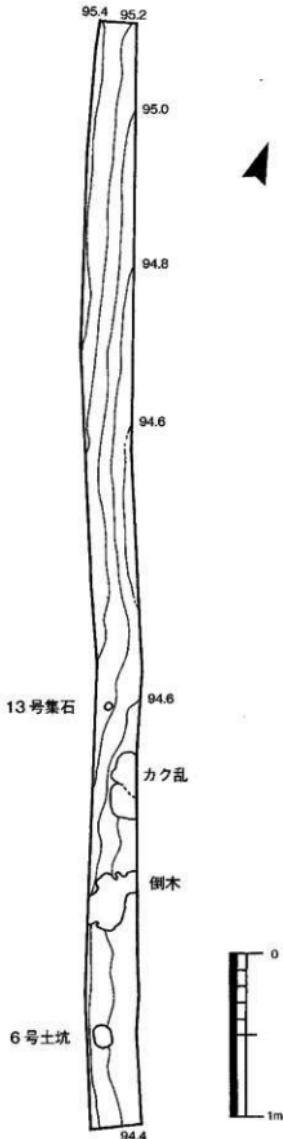
遺構に伴って、弥生・古墳時代の上器・石器も若干出土している。

まとめ

比較的良好な地理的条件を備えていたが、集石遺構及び土坑を各1基検出したにとどまった。

16区に直交する形で排水建設に伴う17区を調査し、弥生・古墳時代の竪穴住居跡を1軒検出した。

調査地の幅は僅かに80cmである。



16. 16区遺構配置図 (1 / 300)

17区の概要

「京」台地の北東側の端部付近に位置している。
13区及び16区をつなぐ調査区であるが、排水路工事に伴う調査のため、幅は僅かに80cmである。
それでも、竪穴住居跡を1件検出している。

検出遺構

弥生・古墳時代の竪穴住居跡を1軒検出した。

出土遺物

壁際ぎりぎりで弥生・古墳時代の甕の口縁部が出土している。

縄文時代早期及びIH石器時代の包含層から遺物が出土しているが、量は多くない。

まとめ

比較的厳しい調査条件であったが、竪穴住居跡を検出できたことは1つの成果であった。今後も僅かな条件でも整えば、調査を行う必要がある。

遺物包含層は安定しており、今回のような調査を今後とも積み重ねていく必要がある。



17. 17区遺構配置図 (1 / 60)

23区の概要

「原」台地の南東側の端部付近に位置している。調査区の南東端から五ヶ瀬川に向かって急激に傾斜している。

作業道の改良工事に伴う調査である。アカホヤ層の一部まで削平されていた。竪穴住居跡1軒、土坑1基、溝1基を検出した。遺物は多くはない。

竪穴住居跡内より旧石器時代の使用痕剥片が出土している。

検出遺構

縄文時代晚期の土坑1基と弥生・古墳時代の竪穴住居跡1軒を検出した。その他に、時期不明の溝を1基検出している。

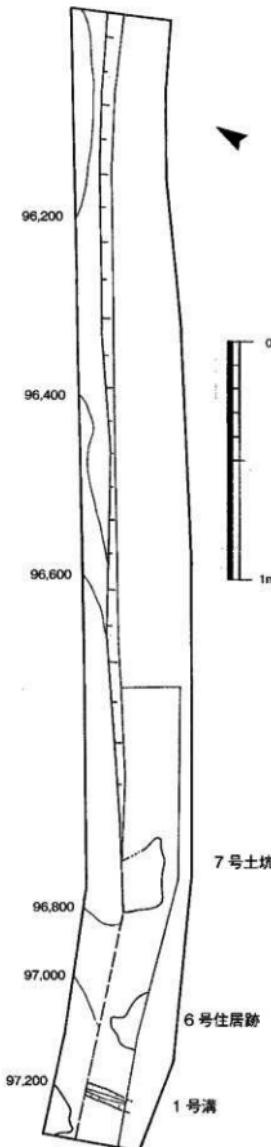
出土遺物

縄文時代早期の土器・石器が若干出土した。遺構に伴って、弥生・古墳時代の土器・石器も若干出土している。

まとめ

作業道のため、アカホヤ火山灰層の一部を残し上部は削平されていたが、IV層下面で竪穴住居跡、土坑、溝を検出した。

傾斜地であれば、包含層や遺構が削平を免れて残されている可能性が高い。周辺の開発には十分注意する必要がある。



18. 23区遺構配置図 (1/200)

番号	遺構名	調査区	長軸	短軸	深さ	出土遺物(遺物番号)	備考(付属施設等)
1	1号 集石遺構	14区(1次)	70	60	15	石器(8)	一部削平、遺物は剖削時代(?)
2	2号 集石遺構	14区(1次)	140	80+	20	なし	一部のみの調査
3	3号 集石遺構	14区(1次)	(85)	(50+)	15	なし	一部削平、4号と近接する。
4	4号 集石遺構	14区(1次)	40	30	15	石器(6)	一部削平、4号と近接する。
5	5号 集石遺構	14区(1次)	65	(50+)	15	なし	一部削平、6号と近接する。
6	6号 集石遺構	14区(1次)	(115)	(100)	20	なし	一部削平、5号と近接する。
7	7号 集石遺構	14区(2次)	105	100	20	土器(14.15)	人頭大の川原石を使用、8・9号と近接する。
8	8号 集石遺構	14区(2次)	(65+)	50	13	なし	7・9号と近接する。敷石を使用する。
9	9号 集石遺構	14区(2次)	85	70	28	なし	7・8号と近接する。敷石を使用する。
10	10号 集石遺構	14区(2次)	130	(90)	25	土器(9.10.12)	一部のみの調査、11号と近接する。
11	11号 集石遺構	14区(2次)	(95+)	90	20	土器(5.11)	10号と近接する。
12	12号 集石遺構	14区(2次)	(105-)	(60+)	20	なし	一部のみの調査
13	13号 集石遺構	14区(1次)	50	40	12	土器(16) 打製石斧(7)	アカホヤ層～IV層上面まで削平
14	1号 壁穴住居跡	6区	(350+)	(235-)	(45)	なし(周辺に同時代土塗:150～151)	ベット状の遺構、一部のみの調査
15	2号 壁穴住居跡	11区	210+		80	土器(152～158)	壁櫛(?)・ベット状の遺構、一部のみの調査
16	3号 壁穴住居跡	13区	360	240+	40	土器・石器(159～161)	
17	4号 壁穴住居跡	14区(2次)	(280+)		30	土器・石器(162～182)	浅い土坑(施土多?)、一部のみの調査
18	5号 壁穴住居跡	17区	410	(80+)	55	土器(183～188)	pit有、一部のみの調査
19	6号 壁穴住居跡	23区	(285+)	(100-)	93	土器(189～190)	階段状施設、一部のみの調査
20	1号 土坑	5区	60	53	13	なし	
21	2号 土坑	11区	55	52	9	土器(191～192)	
22	3号 土坑	13区	160	140	8	土器・石器(4～5)	一部のみの調査
23	4号 土坑	13区	(225+)	(70+)	42	土器・石器(17～20)	一部のみの調査
24	5号 土坑	14区(1次)	95	(55+)	35	土器	一部のみの調査
25	6号 土坑	16区	100	85	20	土器・石器	
26	7号 土坑	23区	(360+)	(96)	86	土器(21)	階段状施設、一部のみの調査 住居跡(?)
27	1号 焼土集中部	6区	173	88		なし	焼土の厚み 5cm
28	2号 焼土集中部	11区	118	65	28	土器	上面に焼土が厚く堆積(10cm)
29	1号 潟	23区	(163+)	57	10	なし	一部のみの調査

()は検出部分の計測値 単位はcm

19. 検出遺構一覧表

4. 遺構と遺物

旧石器時代

主にVI層上面から出土している。上部が削平されている調査区の一部や堅穴住居跡内からの出土例がほとんどで、最も多くない。遺構の検出もなかった。工事の大半が、旧石器時代包含層まで達するものでないため、ほとんどの地区で包含層が保存されることになった。

1は、頁岩製の剥片尖頭器である。石材が良質ではなく、全体に荒い加工が施されている。片面には自然面をそのまま残している。先端部は欠損している。

2は、流紋岩製のスクレイパーである。形状は先頭状石器に似る。先端部を作り出し、全周に丁寧な加工を施している。先端部は欠損している。

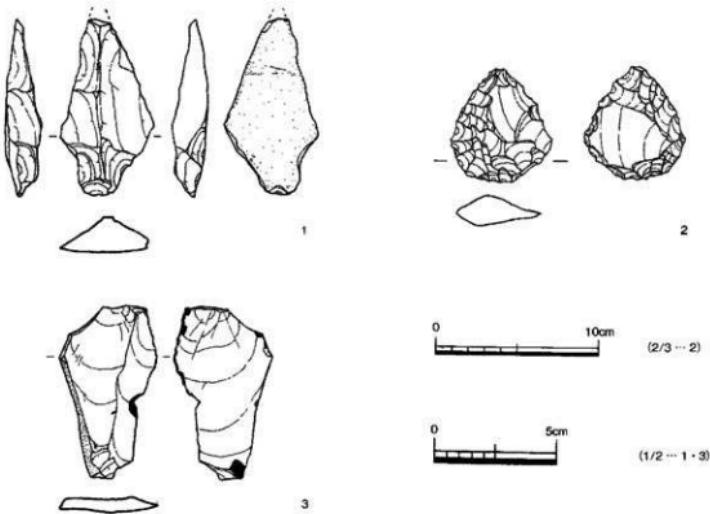
3は、流紋岩製の使用痕剥片である。1号堅穴住居跡より出土している。打面を有し、一部に自然面が残る。

上崎地区遺跡については、調査区の制約からAT層までの掘り下げは行なっていない。五ヶ瀬川を挟んだ対岸には、藤田遺跡、駄小屋遺跡、矢野原遺跡などの旧石器時代の遺跡が所在する。

特に、矢野原遺跡ではAT層下位の黒色帯のさらに下層から遺物の出土例があり、上崎地区でも良好な包含層が残されている可能性が高い。

縄文時代早期

主にアカホヤ層の上面で土坑1基を、下面で集石遺構12基と土坑2基を検出した。また、IV層に掘り込まれる形で集石遺構を1基検出したが、アカホヤ層及びIV層の一部が削平され、寄せられた礫と一緒に砂岩製の打製石斧と撲糸文土器が出土している。遺物の集中部分は11区・13区・14区の一部で見られる。しかし、ほとんどの調査区で量は少ないが確実に出土している。



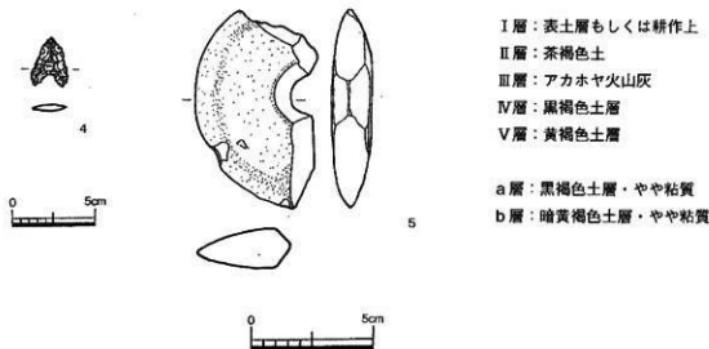
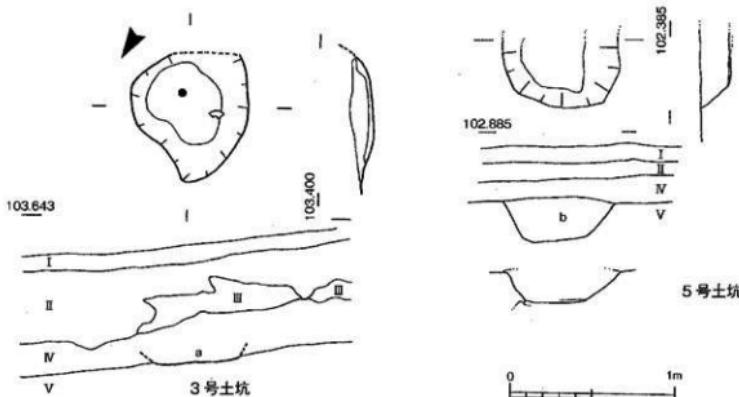
20. 旧石器時代出土遺物（石器）実測図（1／2・2／3）

3号土坑及び5号土坑は、アカホヤ層の下位で検出された。いずれも一部用地外へ延びている。平面形はやや変形した円形である。3号土坑はV層の上面をやや浅く削った程度であるが、5号土坑は下面までの深さが約35cmある。5号土坑ではチャート製石鏃(35)の他若干の遺物が出土した。

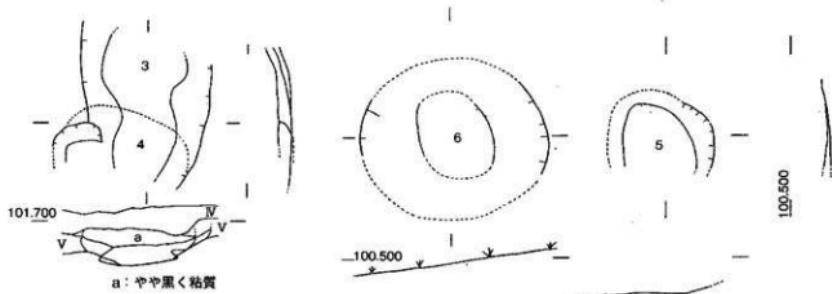
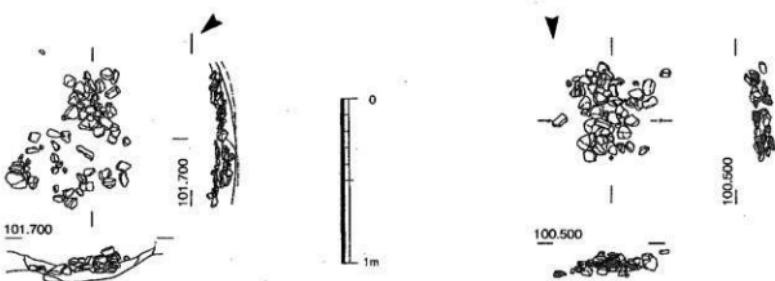
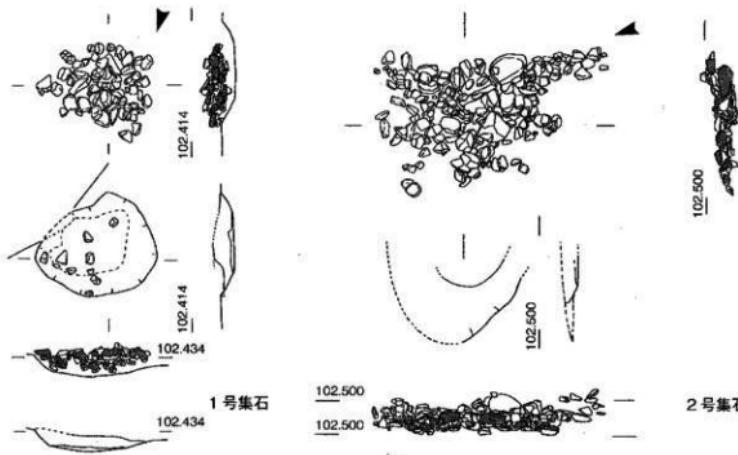
3号土坑では、チャート製の石鏃と砂岩製の環状石斧が各1点出土した。環状石斧は薄手で、半分欠損している。

集石遺構は、13基検出した。敷石を有するものが2基(7・8号)、近接するタイプが3例(3・4号、5・6号、10・11号)、人頭大の川原石を集めたものが1基(9号)検出された。その外に、縄文時代早期の撚糸文遺物と後・晩期所産と思われる打製石斧が疊と一緒にまとめられている事例が1基(13号)ある。

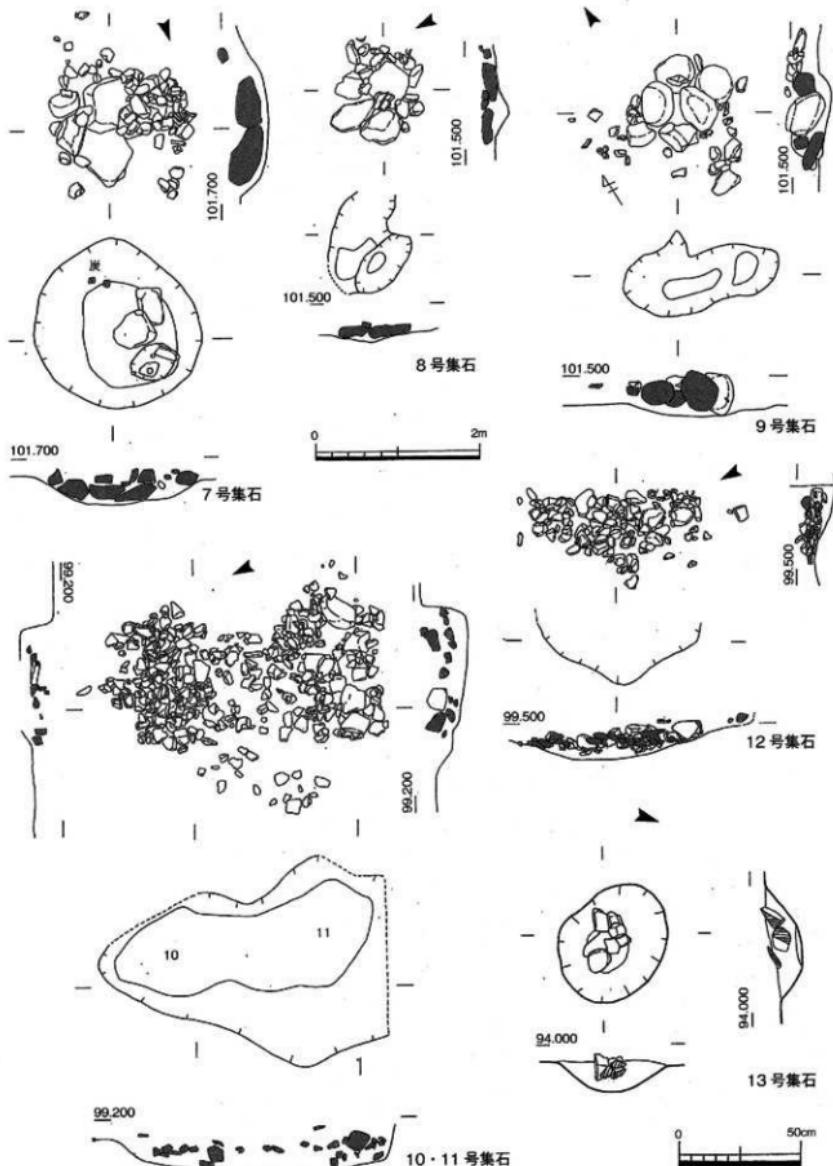
集石遺構からの出土遺物は少なく、上器は一例を除き全て梢円押型文である。



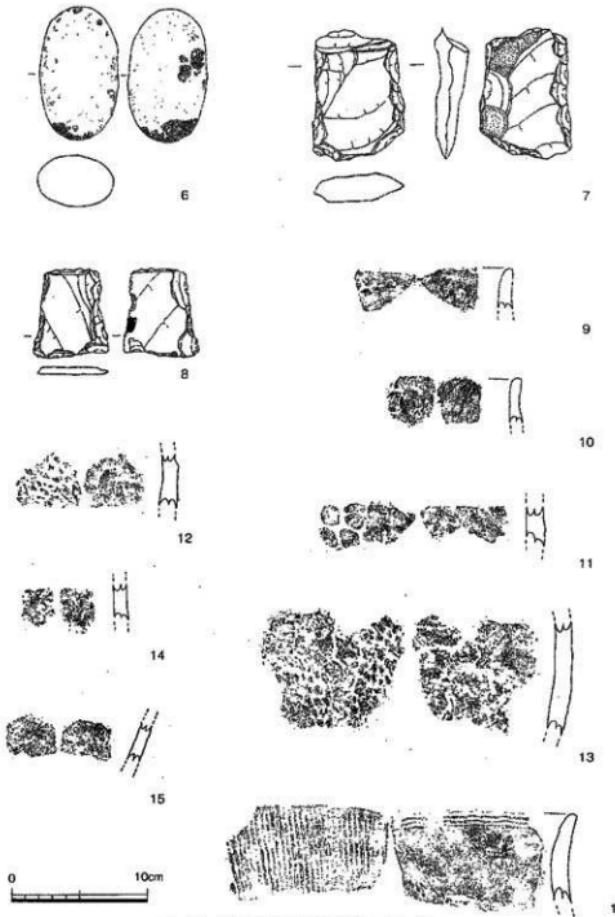
21. 縄文時代早期土坑実測図(1~30) 及び出土遺物(1/3・2/3)



22. 集石構造実測図① (1 / 30)



23. 集石造構実測図② (1 / 20 (13号集石のみ) · 1 / 30)



21. 集石遺構内出土上遺物尖測図 (1 / 3)

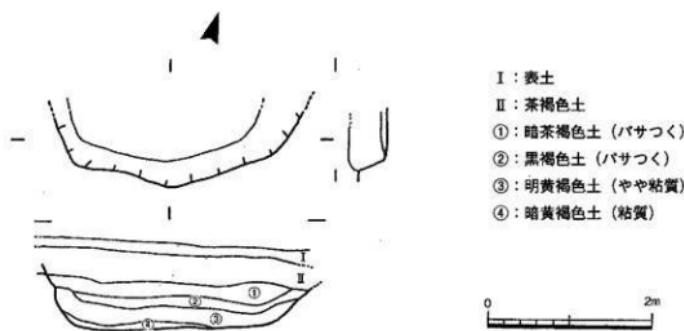
また、狭い調査範囲の影響からか集石遺構の一部が用地外へ延びる例が多い。堅穴住居跡や上部からの搅乱もあり、No.8 のような打製石器や弥生土器片が集石遺構の間から出土している。

6は、阿蘇溶結凝灰岩製の叩石である。端部に打痕が見られるものの顕著ではない。亦変している。

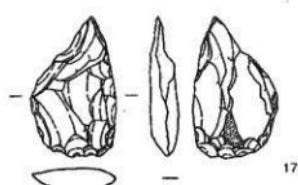
7は、砂岩製の打製石斧である。一部自然面が残り、上部半分と刃部が欠損している。

8は、千枚岩製の打製石器である。収穫具の一部とも考えられるが、欠損の為詳細は不明である。一部に磨痕が残り、縁の部分に丁寧な加工が施される。

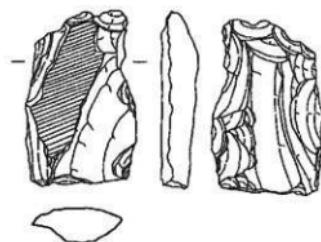
9~15は、精円押型文土器である。9~11は楕円粒が大きく、灰褐色を呈する。12と13・16は器壁が厚い。捺糸文を表面は縦方向に、口唇部裏面には横方向に施す。



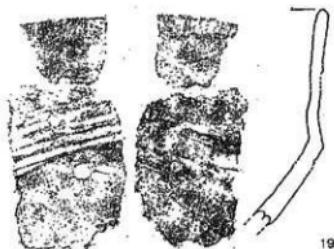
4号土坑



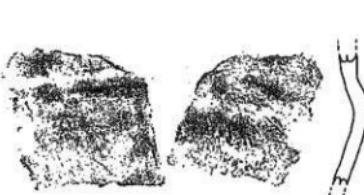
17



18



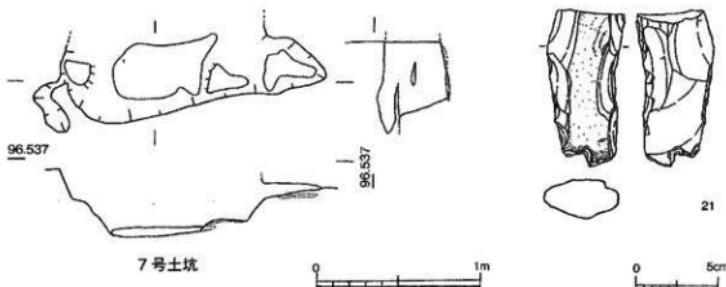
19



20



25. 繩文時代晩期土坑実測図① (1／30) 及び出土遺物実測図 (1／3)



26. 縄文時代晩期土坑実測図② (1 / 60) 及び出土遺物実測図 (1 / 3)

縄文時代後・晚期

北方地域では、この時期の遺構の検出は早期に比べて極めて少ない。上嶋地区遺跡では、土坑を2基検出するにとどまった。黒色磨研土器が16区の倒木痕内及びその周辺で比較的まとまって出土している。

4号土坑及び7号土坑は、アカホヤ層上面で検出した。いずれも一部用地外へ延びている。

4号土坑の平面形は円形と思われるが、大部分は用地外にあり詳細は不明である。床面は平坦である。付属施設等は不明である。

出土遺物には砂岩製の打製石斧（17・18）、精製磨研土器の浅鉢（19・20）等が山上している。

17と18は砂岩製の打製石斧である。17は細身で薄く全体に丁寧なつくり、18はやや幅広で厚く荒い加工が施される。

19と20は精製磨研土器の浅鉢である。この他、粗製深鉢の洞部片も出土している。

19は外側から穿孔されている。頸部から胴部への屈曲部に浅い沈線が4条施文されている。口縁部から頸部にかけてススが付着している。

7号土坑は、平面形は不定形で、両端には段が作られる。遺物も砂岩製の打製石器（21）を除いて出土していないので、詳細は不明である。

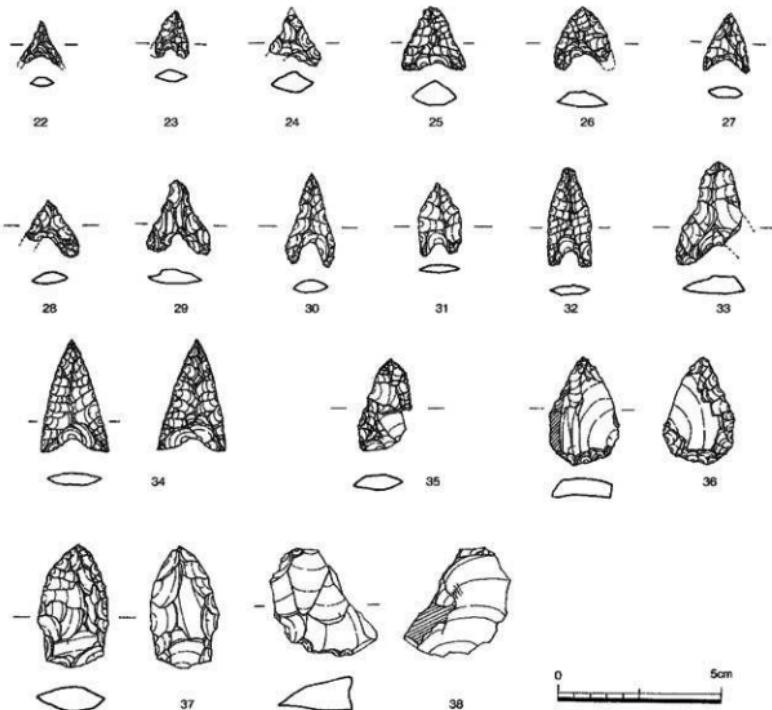
21は砂岩製の打製石器である。半分は欠けているが、全体は三日月状をしていたと思われる。自然面を有し、中央部は厚く、端部に向かって刃部を作り出す加工が見られる。収穫具として使用されたと思われる。刃部は一部欠損している。

縄文時代の石器

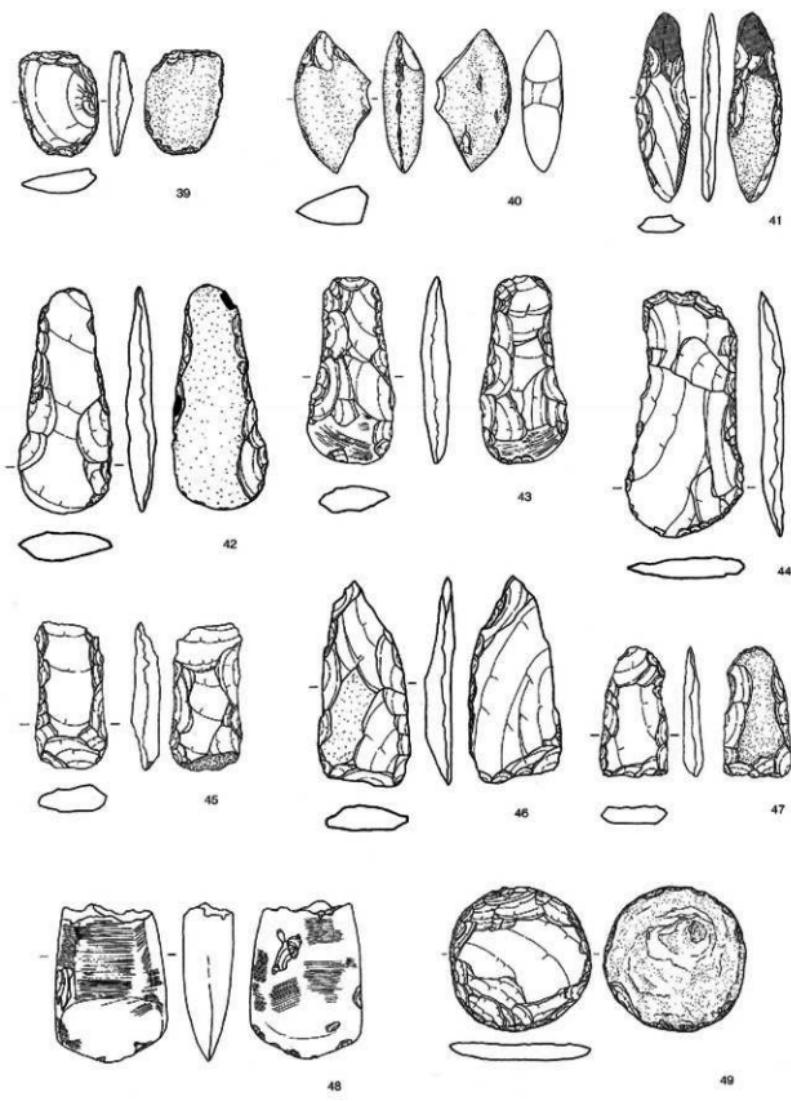
縄文時代の石器として、石鏃、スクレイパー、環状石斧、石槍、打製石斧、磨製石斧、砾器、石核、磨石、凹石、石皿等が出土している。包含層として比較的まとまって出土するのは、11 区、13 区、14 区である。量的には少ないものの、外の調査区でも出土している。環状石斧や石槍、蛇紋岩製の磨製石斧、局部磨製石斧、石皿などの重要な石器の多くは表採品である。これらの遺物の多くは、調査区以外の畠の隅に焼け石と一緒に無造作に寄せられていた。今後、周辺の面的な調査が切望される。

22 から 35 は石鏃である。石材はチャートが多く、流紋岩や安山岩・ホルンフェルスなども使われている。形態はすべて凹基無茎鏃で、基部の抉りが非常に深い錐型鏃の他、抉りが浅く長さが長いタイプや幅と長さが同じくらいのものがある。

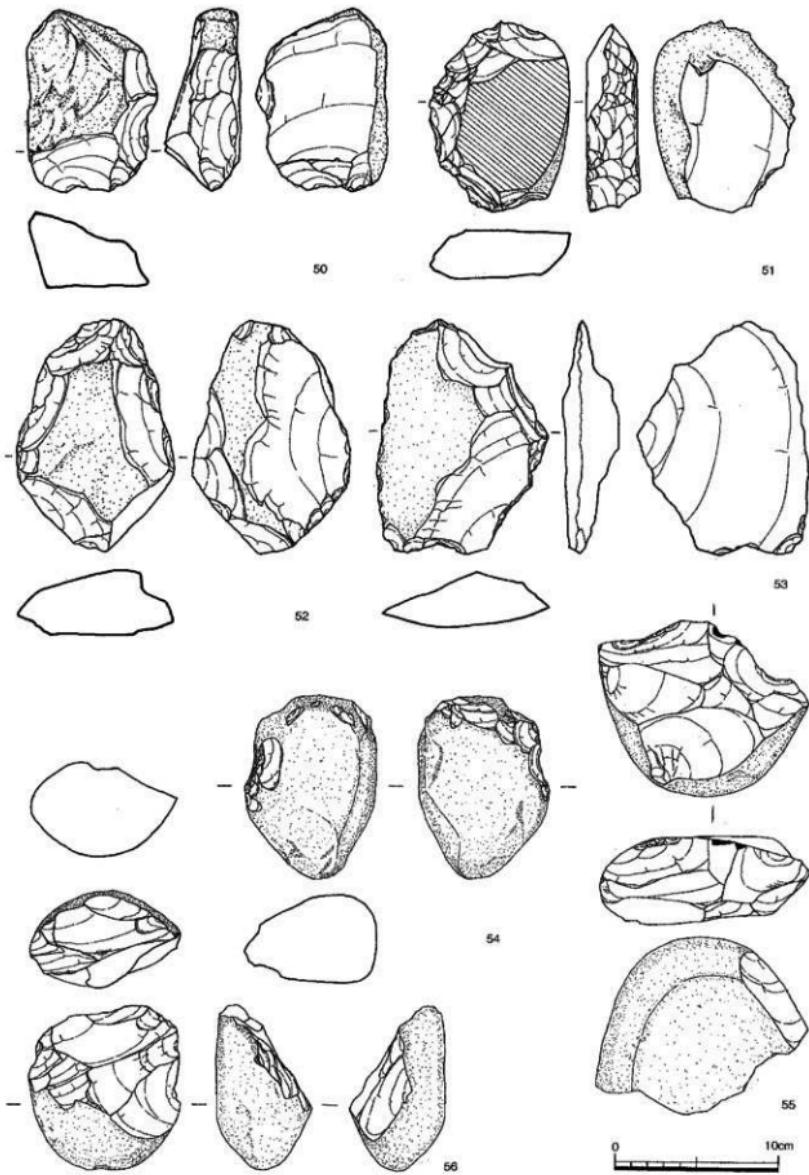
36 はチャート製のスクレイパーである。先端部は錐としての機能も考えられる。人差し指を当てる部分を切断技法にて作り出している。



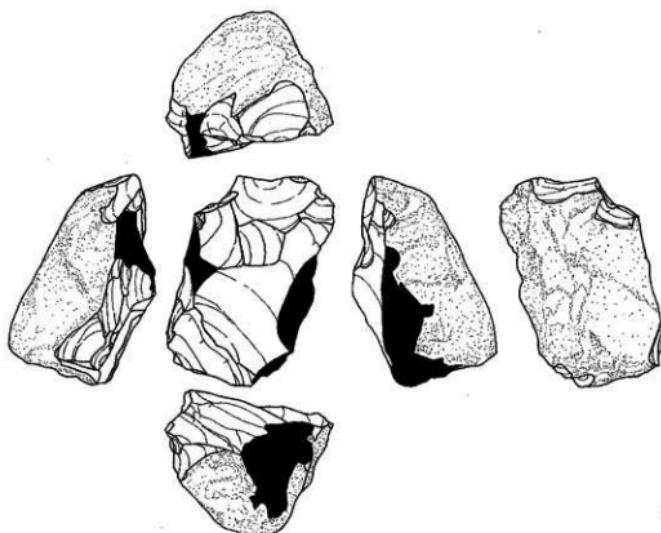
27. 縄文時代出土遺物①(石器)実測図(2/3)



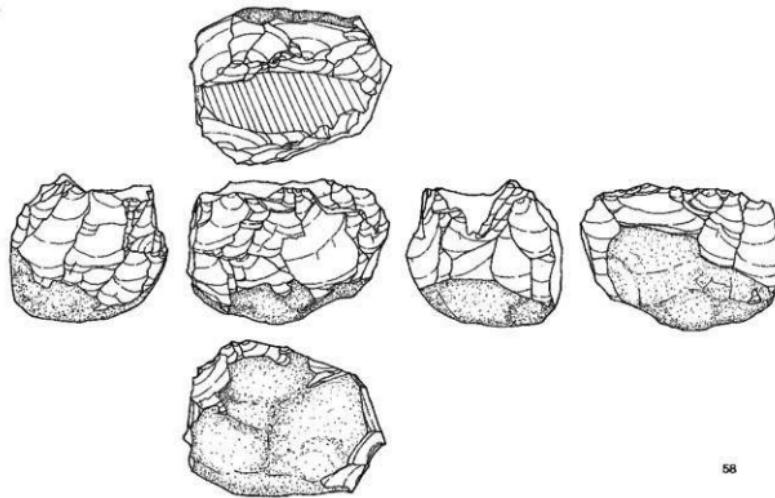
28. 紹文時代出土遺物②(石器) 實測図 (1 / 3)



29. 縄文時代出土遺物③(石器) 斧測図(1/3)



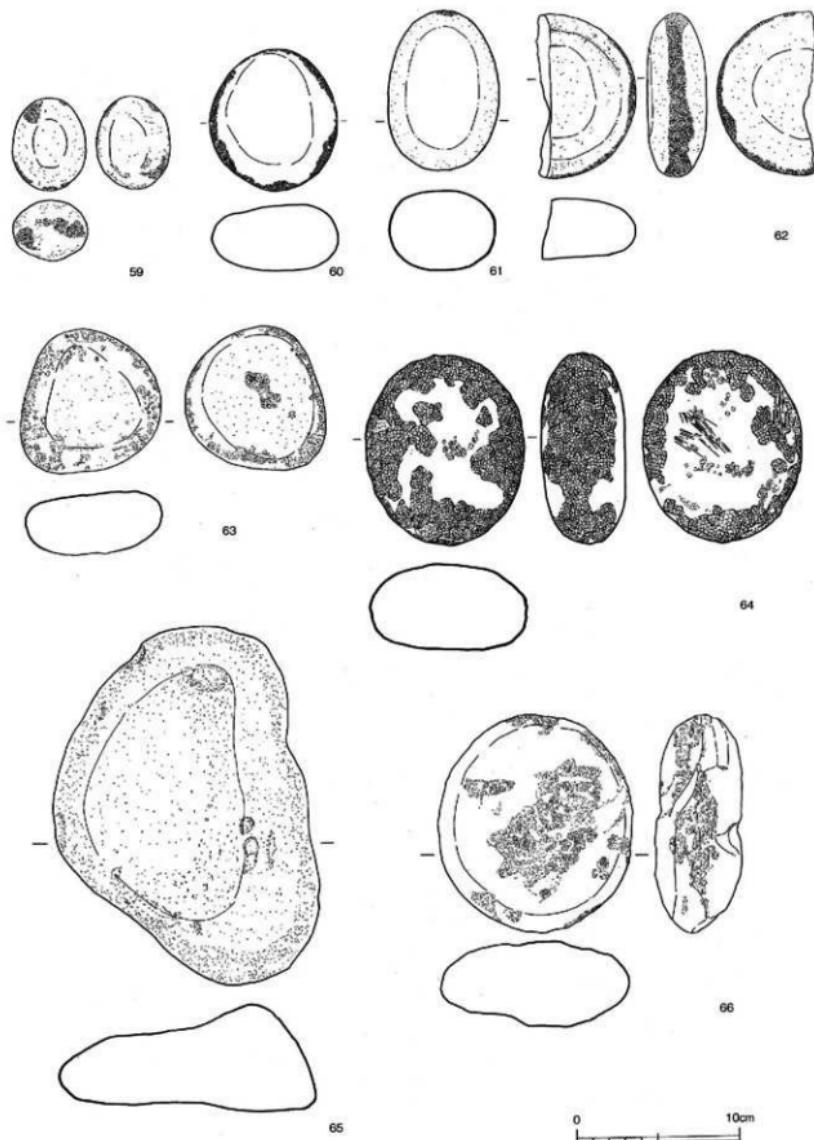
57



58



30. 繩文時代出土遺物④(石器) 実測図(1/3)



31. 縄文時代出土遺物⑤（石器）実測図（1／3）

37はホルンフェルス製の石器で、基部が欠損している。両面ともに丁寧な加工によって丸みを帯びた先端部を作り出している。中央部にはかすかな磨痕が残る。形態的な特徴から石鎚としたが、類例が少なく詳細は不明である。

38はチャート製のスクレイパーである。鋸歯状の加工が施される。

39は頁岩製のスクレイパーである。全周に細かい加工を施す。平面はすべて自然面である。

40はホルンフェルス製の環状石斧である。5に比べ厚手である。2/3が欠損している。

41はホルンフェルス製で石槍と思われる石器である。一方の端部には粗い磨痕が見られる。

42~47は砂岩製の打製石斧である。42の平面はすべて自然面である。43の刃部は丁寧な磨きによって作り出されている。44から47は扁平打製石斧である。45と47は幅身が狭く小ぶりである。

48は蛇紋岩製の磨製石斧である。上部が欠損している。刃部がきれいなU字形をなしていない。蛇紋岩製の磨製石斧は、北方地区でも出土例は多くない。石材である蛇紋岩も五ヶ瀬川上流域に包蔵地があり比較的手に入れにくいため、そこは丁寧に再生しながら使ったのではないかと思われる。

49は緑色岩製で、片面に自然面の残し円形に仕上げた打製石器である。

50から54は礫器である。石材は、50・51が頁岩、52から54が砂岩製である。

55から58は石核である。石材は55・56がホルンフェルス、57・58は流紋岩である。55・56は種の一面からのみ剥離を行っている。57は打面調整後に打面を移動させながら剥離を行っている。58は打面形成後にその打面を基準にして剥離作業が行われている。

59から64は敲打器である。59から62が砂岩、63と64は祖母系火山岩類である。59から61には部分的に、63と64には両面に磨痕が入る。63には加工によって凹部を作り出している。

65は砂岩製の石皿で、中央部がかなり凹んでいる。

66は凝灰岩製の石器で両面に比較的大きな凹部を作り出し、側面には一部敲打痕が見られる。

縄文土器

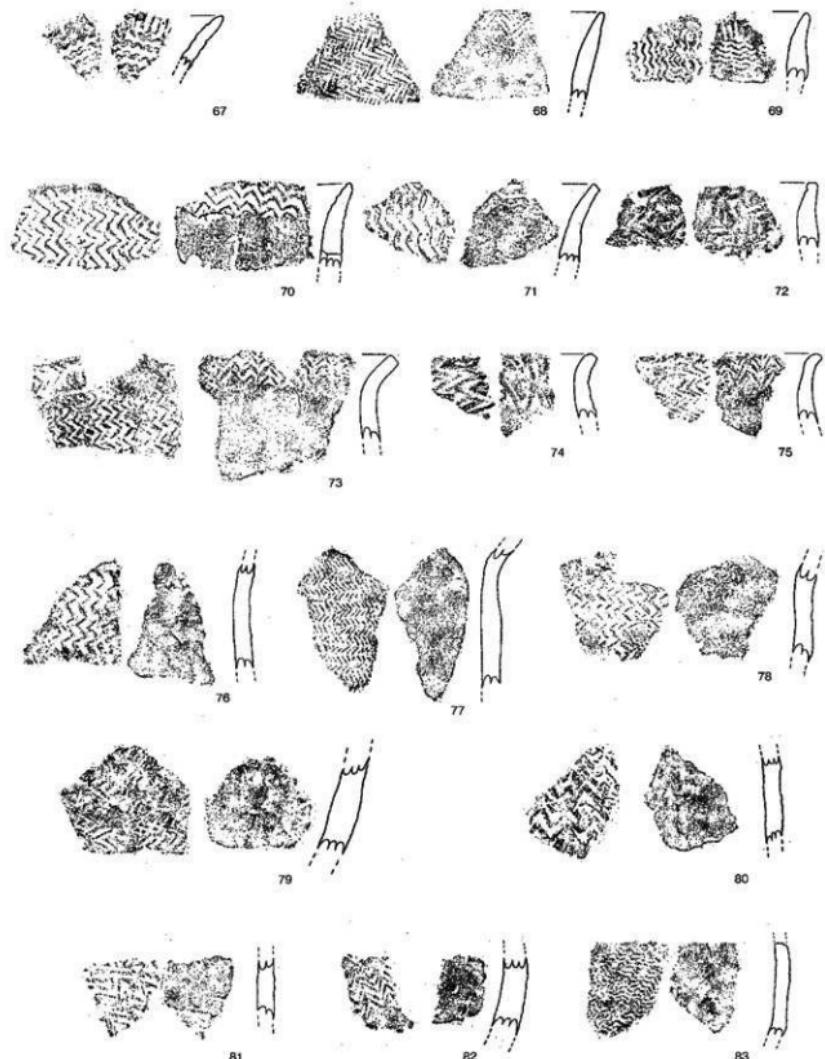
縄文土器は、早期の山形・楕円などの回転施文による押型文土器を中心として、燃糸文・刺突文・押引文・条痕文・無文土器の他、窓ノ神式土器等が出土し、空白期間をおいて、後期から晩期にかけての黒色磨研土器の浅鉢や口縁下部に突唇をもつ粗製深鉢土器が出土する。

出土状況は、石器と同じで、縄文時代早期の土器が包含層として比較的まとまって出土するのは、11区、13区、14区である。量的に少ないものの外の調査区でも出土し、16区の倒木痕及び搅乱と思われる掘り込み中から黒色磨研土器が比較的まとまって出土している。

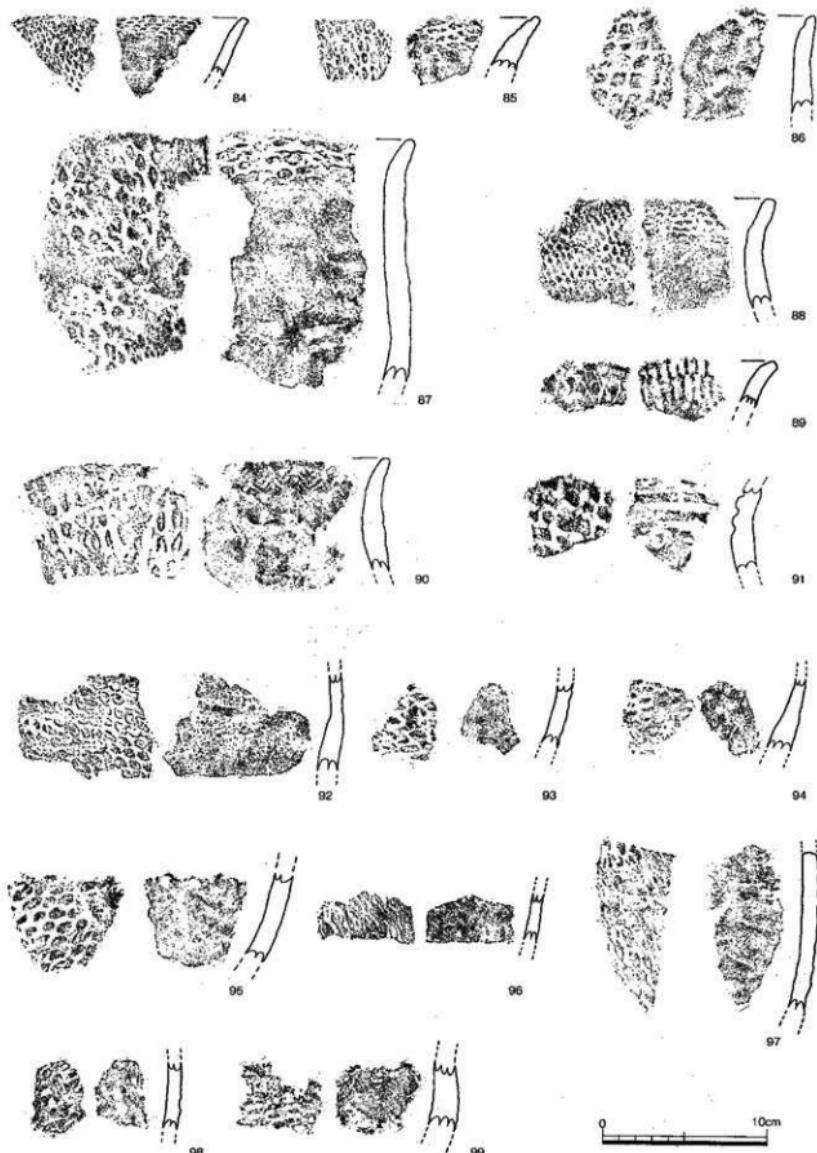
67から83は山形押型文土器である。口縁が外反し、山形押型文を表面には横あるいは縦方向に、内面の口唇部には施文原体を下方向に押圧する例(67・69)と山形押型文を横方向に施文する例(70・73・75)がある。口縁部は口唇下部でさらに屈曲する例(71・73~75・77)もある。

84から99は楕円押型文土器である。山形押型文土器と同様に、口縁が外反し、表面には楕円押型文を横あるいは縦方向に、内面の口唇部には施文原体を下方向に押圧する例(89)と横方向に押圧する例(91)楕円押型文を横方向に施文する例(84~88)がある。口縁部は同様に、口唇下部でさらに屈曲する例(87・88・90・91)がある。

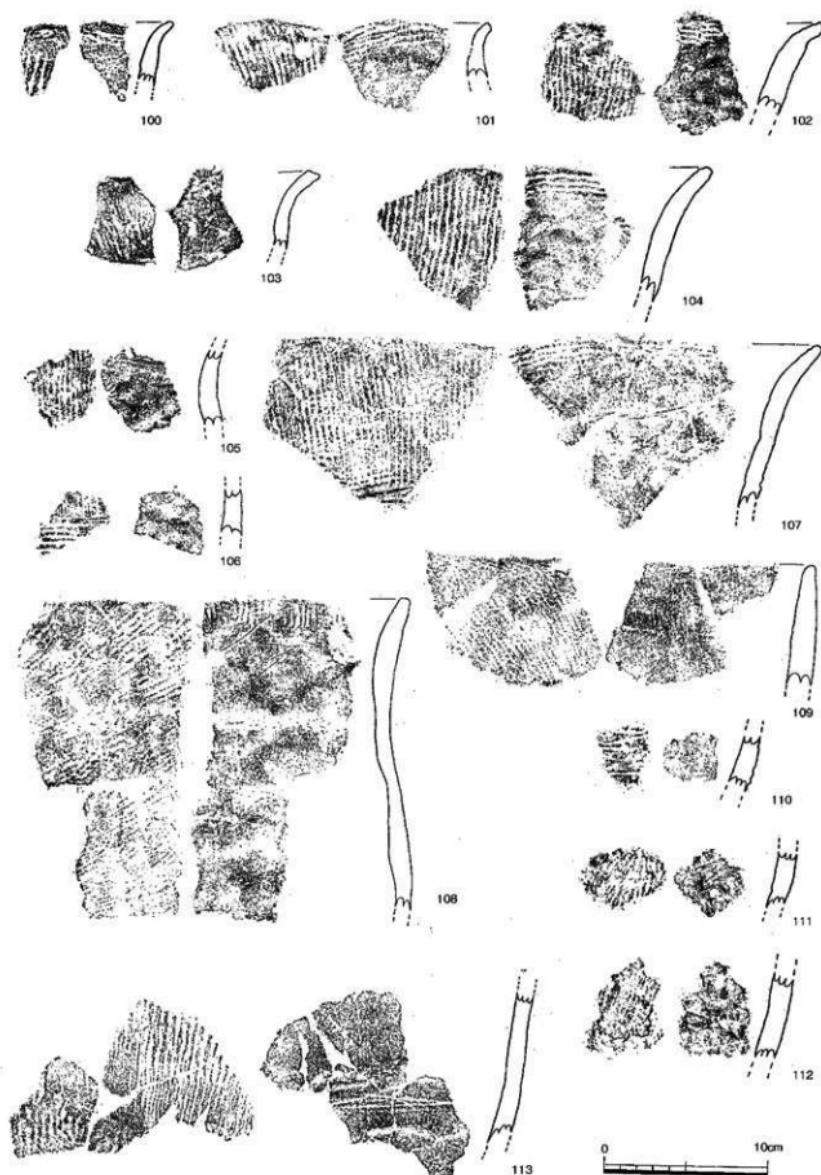
100から114は燃糸文土器である。同様に、口縁が外反し表面には燃糸文を縱さらには横方向に、内面の口唇部に施文原体を下方向に押圧する例(108)と燃糸文を横方向に施文する例(100~104・107)がある。口縁部は同様に、口唇下部でさらに屈曲する例(100~104)がある。113は内面調整に燃糸文の原体を利用している。106・107の事例は、口縁部から頸部にかけて燃糸文を縦方向に、



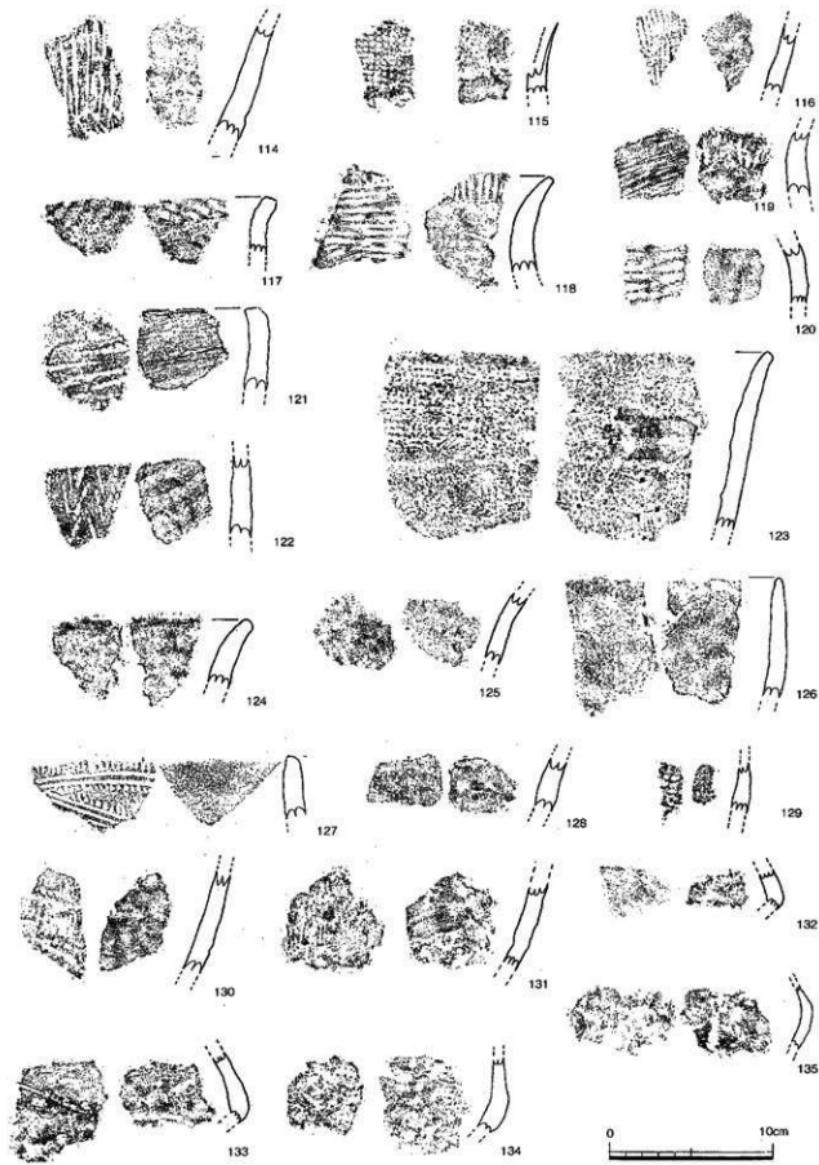
32. 縄文時代出土遺物⑥（土器）実測図（1／3）



33. 繩文時代出土遺物⑦（土器）実測図（1／3）



34. 繩文時代出土遺物⑧(上器)実測図(1/3)



35. 縄文時代出土遺物⑨(上器)実測図(1／3)

頸部から胴部にかけては横方向に施文するものである。

115 は格子目押型文である。裏面は、剥落している。格子目押型文は、山形や梢円と違つて極端に出土例が少ない。

116 は、表面に斜め方向の縄文を施す土器である。内側は、ナデによる調整を行つてある。

117 は、風化で施文がはつきりしない。表面には粗い縄文を斜め方向施す。口縁部は外反し、内側の口唇部にも斜め方向に縄文による施文とナデによる調整が施されている。

118 と 119 は貝殻条痕文土器である。口縁は外反、口唇部には原体による押引き文が施される。

120 は表面に横方向に凹線による施文がみられる。

121 と 122 は、貝殻円筒系の土器と思われる。口縁が内傾し、端部が平たく調整され、貝殻による押引きや腹縁部を V 字状に押し付ける等の施文方法から、吉田・前平式土器と思われる。当地域の押型文土器の中には、この土器の影響を受けたと思われるものが散見される。

123 には、外側口縁下部に横方向に貝殻押引き文を施し、さらにその下方に数条の櫛齒状搔痕が見られる。貝殻による土器調整と思われるが、内外面ともに風化が著しい。裏面は、一部を残しては剥落している。口縁下部は外側にやや開く程度である。

124～126 は無文土器である。124・125 は口縁が外反するが、126 はやや内傾する。125 は風化が著しい。

127 は、篦描沈線文や連点文などの施文技法から、平折式上器と思われる。アカホヤ層下位ではなく、上面の茶褐色上層（Ⅱ層）からの出土である。

128 と 129 は、表面に刺突文が施された土器である。128 には不規則に施文され、129 には列状に刺突が施されている。どちらもアカホヤ層下位から出土している。

130 の表面には貝殻押引き文が施される。一部ススが付着している。

131 の表面には丁寧なナデ調整が施される。ところどころに、撚糸文ではないかと思われる地文がかすかに見える。

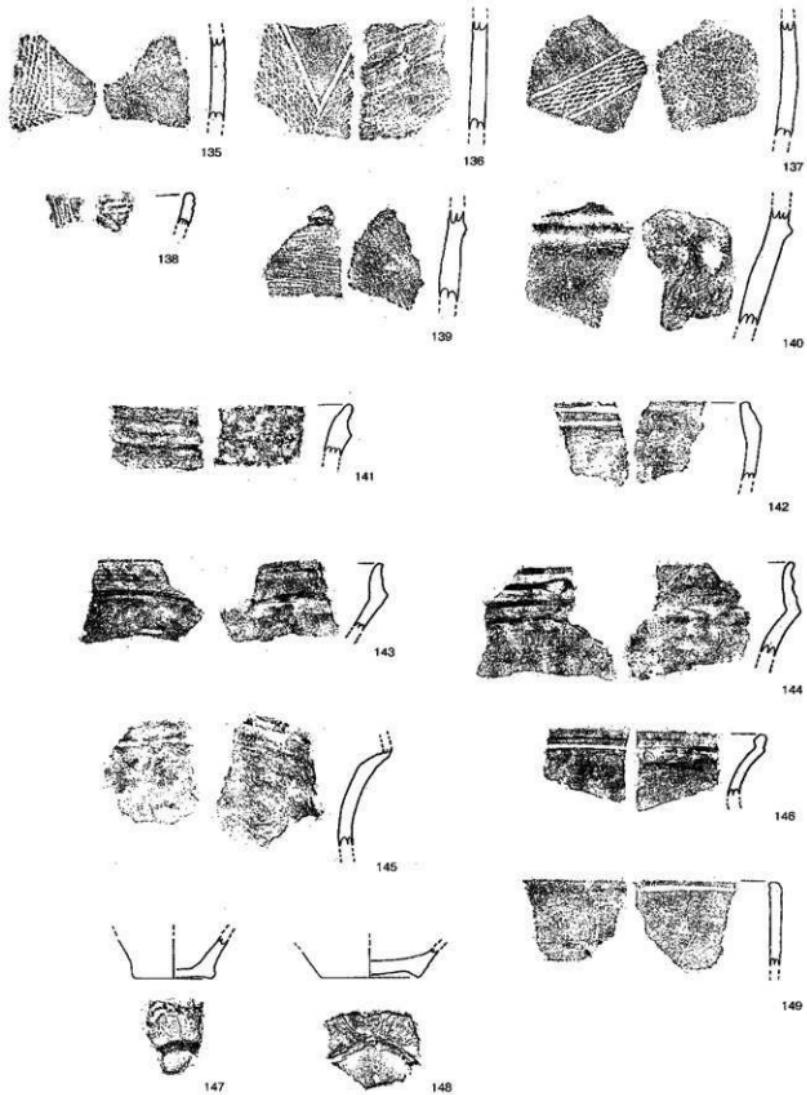
132 から 135 は胴部から底部にかけての土器である。内外面ともに丁寧なナデが施されている。133 は一部に沈線が見え、斜め方向に微細な撚糸文が施される。いずれもアカホヤ層下位からの出土例である。132 と 133 は焼成等から判断して同一固体である可能性が高い。135 は、外の 3 点に比べ薄手である。

136 から 138 は、表面に沈線区画の間に撚糸文を施す塞ノ神式土器である。町内には、アカホヤ層下位から貝殻押引き文を施す塞ノ神式土器の出土例もある。アカホヤ層上位からの出土である。

139 は表面に横方向の沈線文を、内側には縱方向の沈線文が施されている。小破片のため、詳細は不明であるが、胎十・焼成から後期に属する土器と思われる。

140 と 141 は貼付け突帯文を有する粗製深鉢土器である。

142～147 は精製磨研土器で、148 と 149 はその底部である。142・143・146 が浅鉢、144・145 が深鉢、147 は碗と思われる。144 と 145 は焼成等から判断して同一固体である可能性が高い。



36. 梶文時代出土遺物⑩（十器）実測図（1／3）

弥生・古墳時代

この時代の遺構として、竪穴住居跡を6軒と土坑2基、焼土集中部2ヶ所を検出した。出土遺物のほとんどは、遺構およびその周辺から出土している。竪穴住居跡は、台地平坦部に営まれる例が3軒、台地端部に営まれる例が2軒、傾斜地に営まれる例が1軒である。傾斜地に営まれる例は、斜面のわずかな平坦部を利用している。

住居跡の規模は、すべての住居跡を全面調査していないため不明であるが、一辺が3.5~4.5mの小規模なものである。深さは検出面から30cm~1mとバリエーションに富んでいる。壁は山側が深く、谷側が浅くなっている。床面はほぼフラットであるが、柱穴を検出した例は多くない。他地区の調査例から、主柱穴はほぼ4本と思われる。付属施設には、ベッド状遺構や入り口に利用したと思われる階段状遺構、土坑、阿蘇溶結凝灰岩の礫を壁に埋めて棚状にしたもの等がある。

住居跡内の出土遺物には、上器類として高杯、甕、鉢、碗、二重口縁煮などがある。石器類には、石錘、石包丁、叩石、打製石斧、砥石などがある。須恵器や鐵器類は出土していない。

1号竪穴住居跡（37）

6区、尾根が内側に湾曲する斜面の中腹のわずかな平坦部で検出した。1/4ほどの検出で、長軸約3.5m、短軸約2.35m、深さ約45cmを測るが、大部分は用地外へ延びている。床面はフラットで、60cmほど掘り込まれた柱穴を1ヶ所、底面の長軸約80cm、短軸約50cm、深さ20cmの上坑を1ヶ所検出した。ベット状遺構と思われる高まりがあり、床面ほどではないが、表面はやや硬くなっている。

住居跡内からの遺物の出土はないが、周辺部より高杯の口縁部（150）と胴部（151）が出土している。

2号竪穴住居跡（38）

五ヶ瀬川に向かって緩やかに傾斜するものの、6区に比べるとほぼ平坦部と思われる台地上で検出された。両辺と1/4のコーナーのみの検出で、大部分は用地外へ延びている。一辺の長さ約2.1mのみ確認した。検出面から床面までの深さは、約80cmを測る。床面は途中で段がつくもののほぼフラットで、コーナーで10cmほど掘り込まれた柱穴を1ヶ所検出した。一部上部からの掘り込みの影響で、床面が削られている。ベット状遺構と思われる高まりがあるが比高差は10cm程度である。北側の壁、床面から30~40cmのところに阿蘇溶結凝灰岩の扁平礫を埋め込んだ棚状のものを検出した。上面からの遺物等はなく、詳細は不明である。

住居跡からの出土遺物として、甕（152・154・156・158）、高杯（153）、鉢（155）、壺（157）がある。156の甕は、外面に荒いタタキが施され、指圧痕もみられる。胴部の最大径が口縁部径を下回る。上部にはススが付着し、底部が欠損している。

3号竪穴住居跡（40）

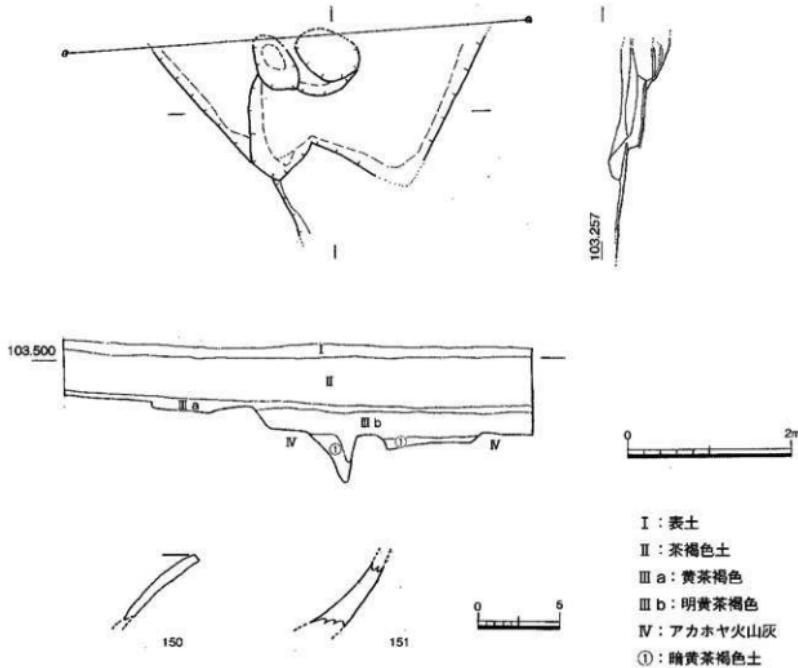
13区のほぼ中央部で検出した。住居跡の1/2を検出している。一辺は4.4mを測る。他辺は調査区外で不明である。ベッド状遺構は確認されなかった。床面はほぼフラットで、検出面から床面までは約10cmを測るが、上層断面の観察では、西側で20、東側で40cmである。確実な柱穴は1ヶ所のみの検出で、床面からの深さは5cmと浅い。中央部には焼土の集中部があるが、下面に掘り込みはなかった。北東の隅には、直径約50cm、深さ10cm及び直径約40cm、深さ20cmほどの上坑がある。内部からの遺物はない。

住居跡からの出土遺物として、若干の土器片と砂岩製の打製石斧（159）、同じく砂岩製の砥石（160）及び砂質頁岩製の石錐（161）がある。砥石は熱を受けていて一面のみを使用している。石錐は打欠き石錐である。重さが 164 g ほどあり、比較的重量がある。

4号竪穴住居跡（41、42）

14区の2次調査で検出した。住居跡は木の根の影響で壁の立ち上がりが不明瞭な部分があり、床面の確認できるところまでを住居跡の範囲としている。したがって、確実に検出したのは 1/4 のコーナーのみであり、一辺 2.8 m + は仮の計測値である。ベッド状遺構は確認できなかった。床面はほぼフラットで、検出面から床面までは約 30 cm を測る。柱穴も検出できなかった。中央部には焼上の詰まった土坑があり、直径約 70 cm、深さ 20 cm を測る。内部からの遺物はない。

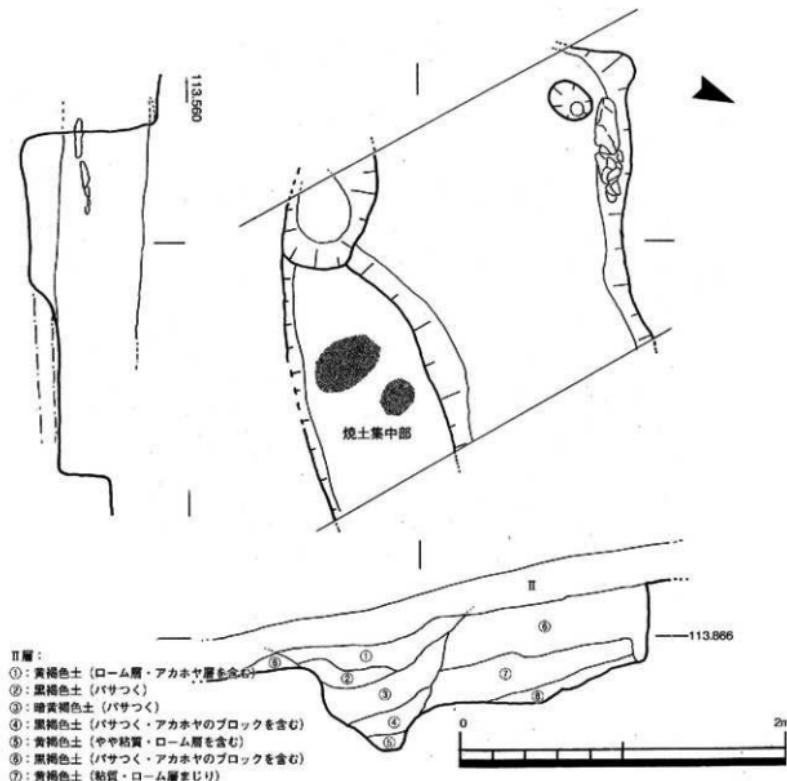
小規模な住居跡ではあるが、出土遺物は充実している。162 は二重口縁壺の口縁部である。櫛描波状文が施される。安国寺式土器である。163 は椀である。内外面ともに磨かれ丁寧なナデ調整が施される。外側から穿孔されている。164 は高杯の胴部である。外面頸部にはナデによる調整が施され、



37. 1号竪穴住居跡断面図 (1/60) 及び6区出土遺物実測図 (1/3)

ススが付着する。165は壺で、復元口縁部の直径は14.5cmを測る。胴部の最大径と口縁部径は、ほぼ等しい。外面にはタタキのあと、口縁部から頸部にかけてと内面にナデ調整が施される。ススが付着する。166は壺の胴部である。内外面ともにナデ調整が施される。167は胴部から底部にかけての壺である。外面にはハケ目のあるあと、内外面ともに指押さえとナデ調整が施される。168は壺の胴部である。外面にはタタキのあるあと、口縁部から頸部にかけてと内面に指押さえとナデ調整が施される。

169は鉢の底部である。若干上げ底で、内外面ともに指押さえとナデ調整が施される。170は壺の底部である。内外面ともにナデ調整が施される。171・172は壺の底部である。外面はタタキのあるあと指押さえによる調整が行われる。内面は指押さえとナデ調整が施される。173は泥岩製の砥石である。一部欠損し、底面と側面に頗著な磨痕が見られる。174は千枚岩製の方形石包丁である。刃部は丁寧に磨いて作られている。両端に抉りが入る。175は疊岩製の叩石である。端部に剥離痕が残る。176は砂岩製の打製石斧である。やや湾曲し、刃部の一部が欠損している。土壙具よりも工具的な使われ方が想起される。177は砂岩製の砥石である。棒状の礫を利用し、側面の利用は認められない。端部には打痕が残る。178は、砂岩製の石錐である。両端を打欠いている。179から181は砂岩製の砥石

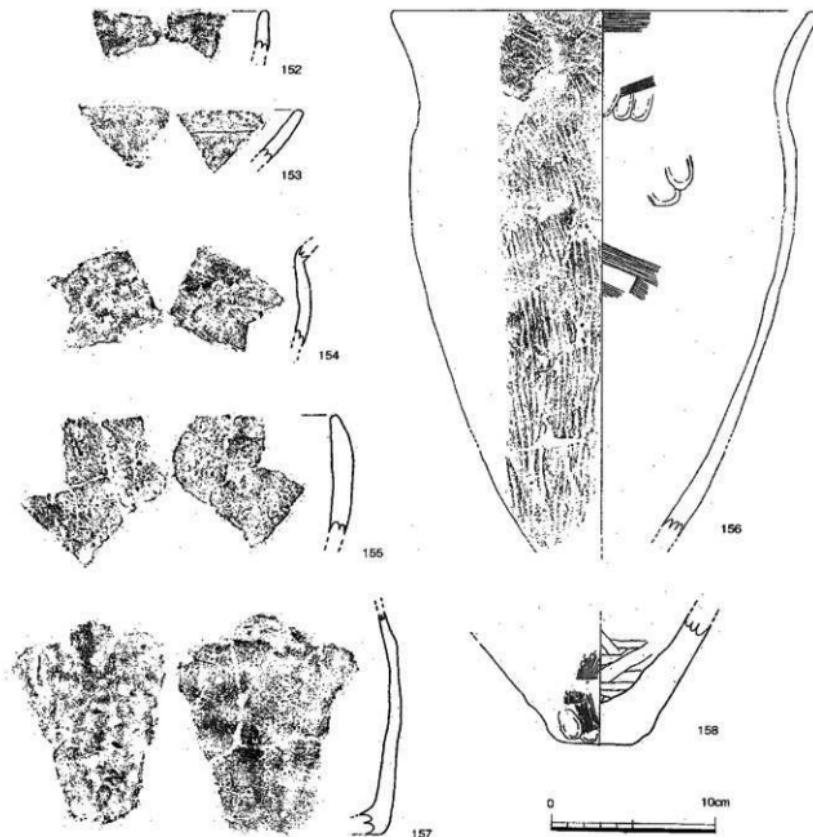


38. 2号竪穴住跡実測図 (1 / 30)

である。179は全面に磨痕がみとめられ、かなり使い込まれているが、180と181は一面のみに使用痕が認められる。179は、手に持つて使用し、180と181は台等に設置して使われたものと思われる。182は頁岩製の石器で、片面の中央部に残る磨痕からと砥石とも考えられるが、重量もあり形状も特異である。

5号堅穴住居跡（43）

17区で検出した。排水路工事のため、検出範囲の幅が80cmである。大部分は用地外へ延びているため、平面形や付属施設・支柱穴等は不明である。一辺の長さは4.4mを測るが、長軸・短軸のどちらに該当するのかは不明である。床面はほぼフラットで、検出面から床面までの深さは、山側で約55



39. 2号堅穴住居跡出土遺物実測図（1／3）

cm、谷側で 30 cm を測る。中央部で柱穴を 2 ケ所検出した。床面からの深さは 20 cm 前後である。内部からの遺物はない。出土遺物はほとんどが甕の口縁部と胴部である。183 は壁際で出土した。胴部から底部を欠く。口縁部径が胴部最大径をわずかに上回る。調整は外外面ともにハケ口とナデである。スヌが付着する。184 から 186 は、外外面ともにナデ調整である。187 と 187 は外面にハケ目と指押さえナデ、内面には指押さえナデによる調整が施される。188 の口縁はやや波状を呈す。

6 号堅穴住居跡（44）

23 区の谷側で検出した。部分は用地外へ延びているため、平面形や付属施設・土柱穴等は不明である。検出した短軸の床面はほぼフラットで、床の状況及び柱穴等から住居跡と判断したが、今後の用地外の調査に期待したい。検出面から床面までは 70~93 cm を測る。セクション部では床面は緩やかにくぼむ。詳細については不明である。柱穴は隅で 1 ケ所検出した。床面からの深さは 10 cm ほどである。北側の壁に段が設けられているが詳細は不明である。弥生土器胴部小片が数点出土している。他に縄文時代後・晩期の精製磨研土器の浅鉢胴部（189）と粗製深鉢土器の口縁部（190）が山上している。189 は外面がミガキ、内面にはナデで調整されている。190 は口縁下部に突帯文を貼り付けた粗製深鉢土器である。内面には指圧痕が見られる。

2 号上坑は 11 区の中央部、アカホヤ層上面で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、長軸 55 cm、短軸 52 cm、検出面からの深さ 9 cm を測る。甕の底部（191）と胴部（192）の他に若干の縄文土器やチャート片・焼け石が出土している。191 の外外面ともにナデと指押さえが施され、外面にはスヌが付着している。192 はナデによる調整が、内面には指押さえが施される。外面にはスヌが付着している。

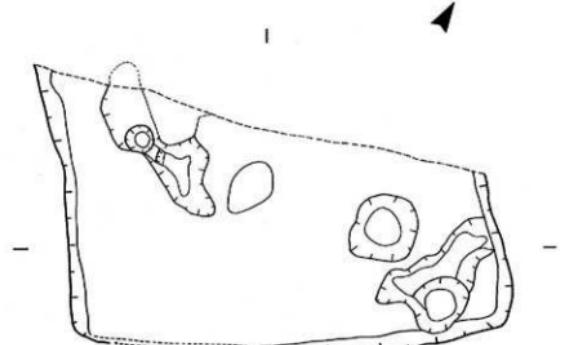
6 号十坑は 16 区のアカホヤ層上面で検出された。平面形は梢円形を呈し、長軸 100 cm、短軸 85 cm、検出面からの深さ 20 cm を測る。床と壁の境に柱穴が 2 ケ所掘り込まれている。柱穴の深さは 20 cm と 40 cm を測る。遺物としては焼繰が若干と砂岩の剥片、弥生土器の小片が出土している。

1 号焼土集中部は、6 区の 1 号住居跡の西側 4m ほど離れたところで検出された。掘り込みはなく焼土が 5 cm ほど堆積している状況である。内部からの出土遺物はない。

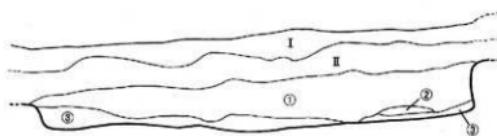
2 号焼土集中部は、11 区の 2 号住居跡の近くで検出された。アカホヤ層上面で直径 50 cm ほどの焼土及びそれに連なる炭の集中部を検出した。焼土の厚さは 10 cm ほどである。焼土と炭の下部で、平面形が細長い梢円形を呈す上坑が検出された。上坑は長軸 118 cm、短軸 65 cm、検出面からの深さ 28 cm を測る。途中で深さ 7~8 cm ほどの段がつく。長軸方向に底面にも、主軸から約 40 度ずらして円形の段がつく。5 cm ほど壊くぼめている。内部からの出土遺物には、甕の破片等のほか縄文土器や焼け石などがある。50 cm ほど離れた調査区の東側壁でも、厚さが 5 cm ほどの焼土集中部がある。掘り込みはない。2 号焼土集中部に関連する焼土と思われる。

その他の時代

出土遺物がなく時期を特定できない遺構として、5 区で十坑を 1 基（1 号上坑）、23 区で溝状遺構を 1 基（1 号溝）検出した。また、ごく最近まで利用していたという諸塚往遺跡を 13 区で検出した。

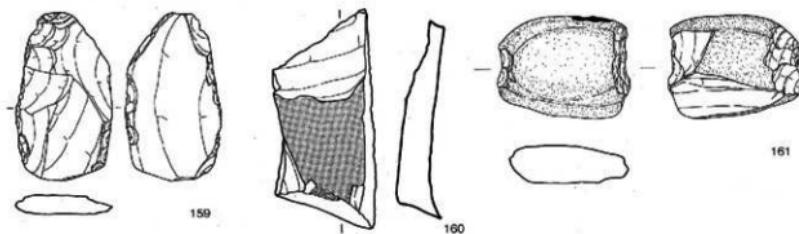
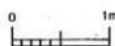


102.276

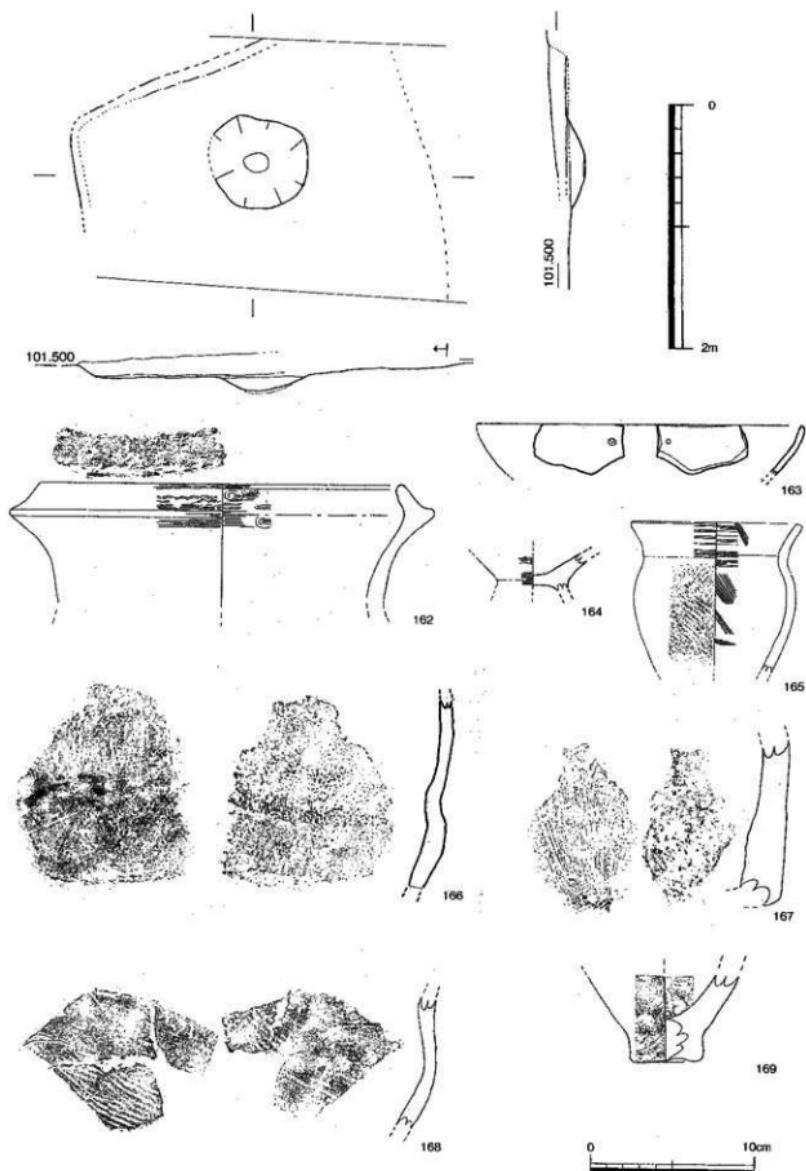


101.676

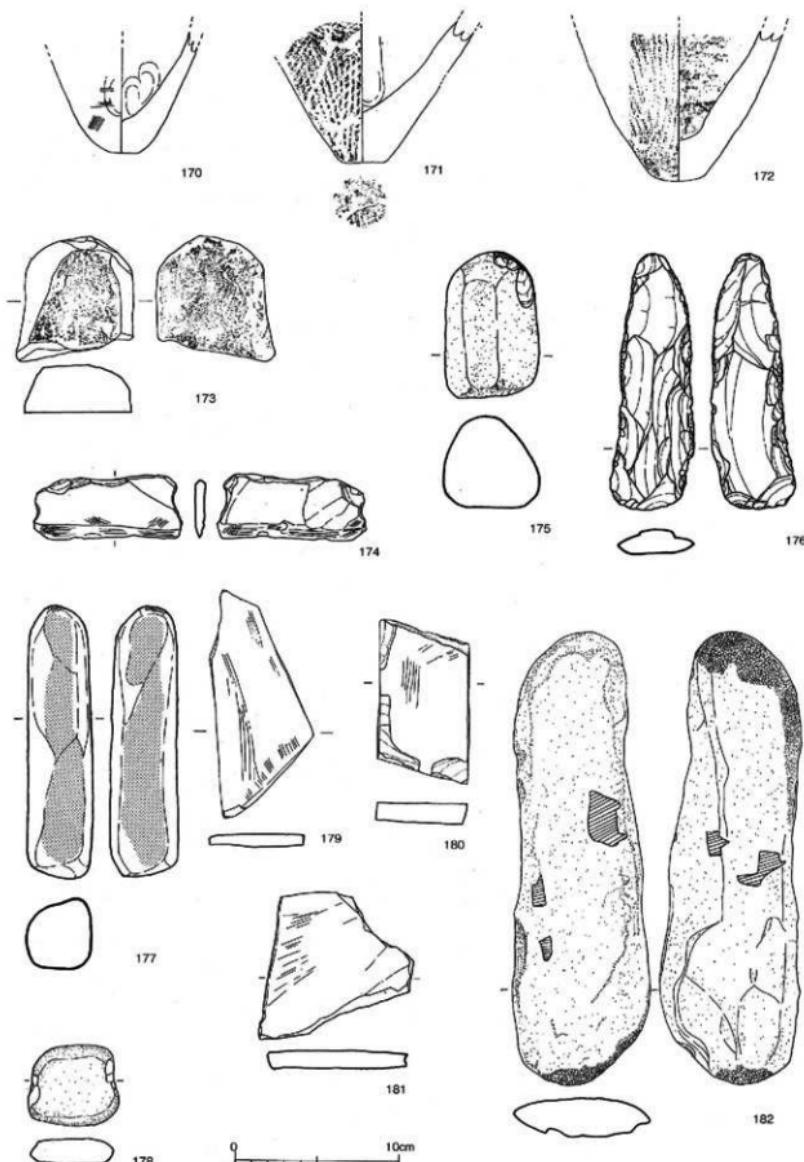
- ①: 黄褐色土 (アカホヤ層)
- ②: 黄茶褐色土 (ヤヤ粘質)
- ③: 明黄茶褐色土 (粘質)



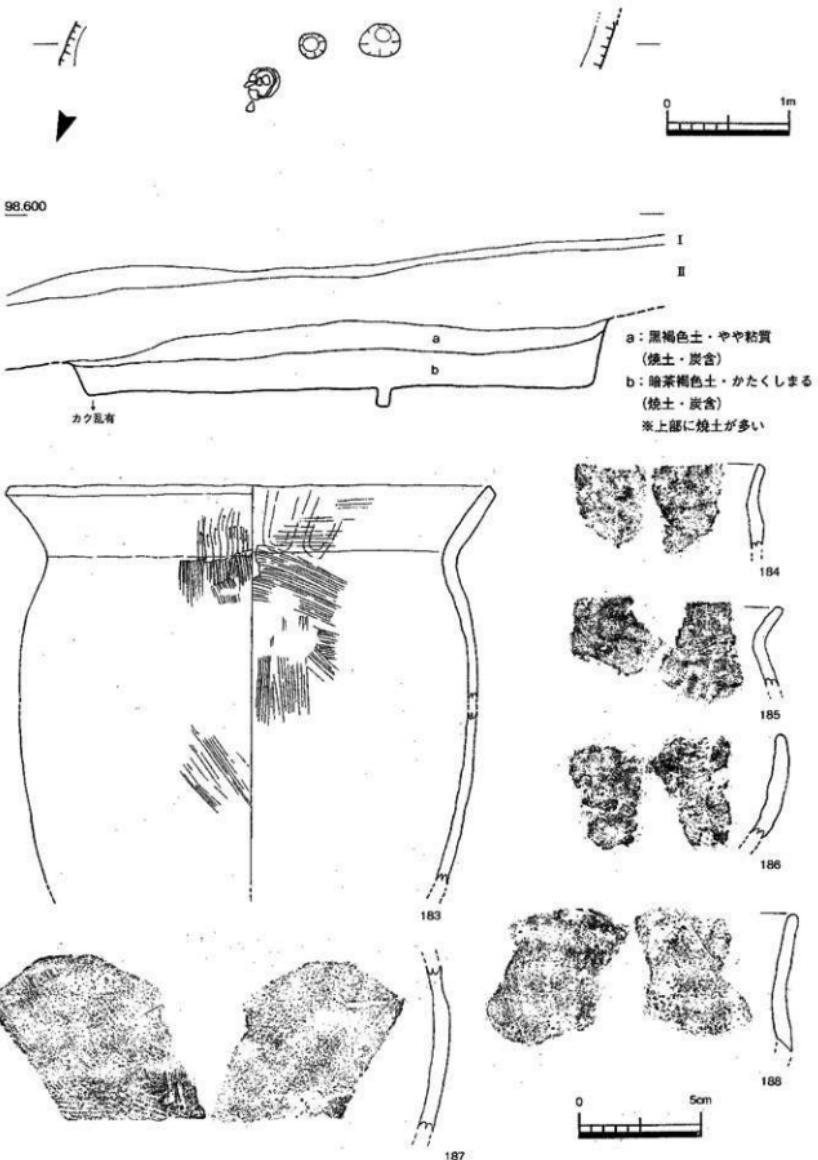
40. 3号整穴住居跡実測図 (1 / 40) 及び出土遺物実測図 (1 / 3)



41. 4号竖穴住居跡実測図 (1 / 30) 及び出土遺物実測図 (1 / 3)



42. 5号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1 / 3)



43. 5号堅穴住居跡実測図(1/40)及び出土遺物実測図(1/3)

1号土坑は直径が約60cm、深さ13cmの円形である。

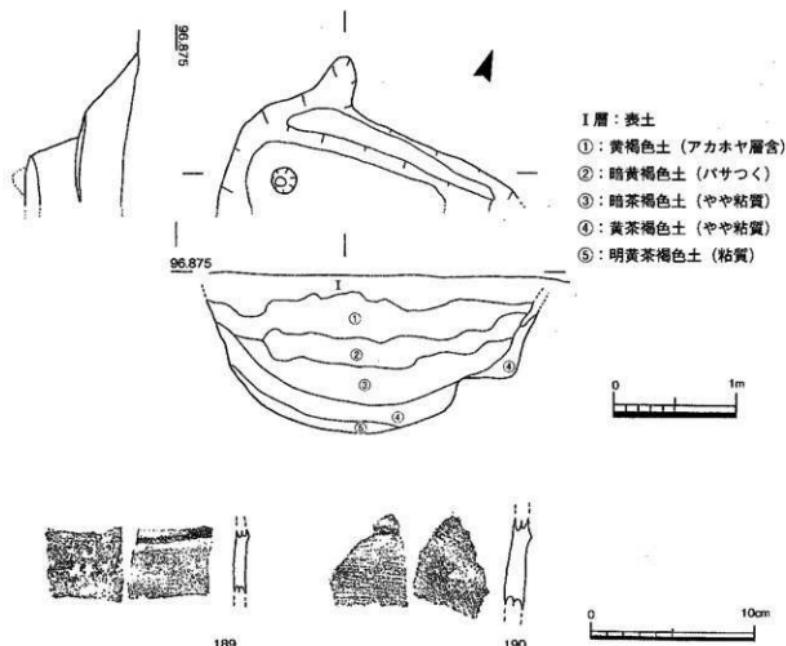
1号溝は調査区に直行する形で、アカホヤ層上面で検出した。検出面での幅は約55cm、深さ10~20cmを測る。

諸塚往還跡は、車社会になって台地を迂回する傾斜の緩やかな道路が作られてからは、次第に使われなくなつて藪となつてゐた。表土層を除去すると阿蘇溶結凝灰岩を削つて整形した跡が検出され、13区の中央部では轍の跡を検出した。

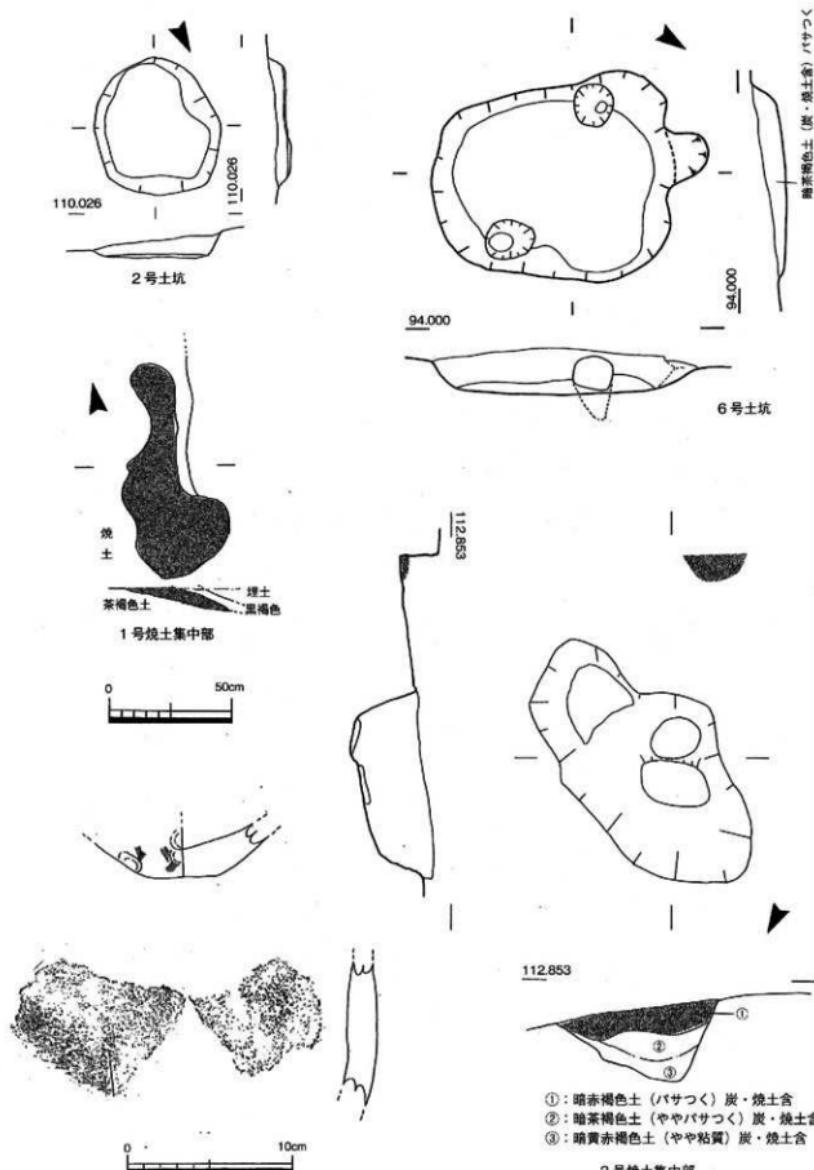
擾乱層出土や遺構に伴わない遺物等について記述する。

194~196は石錘である。上崎地区遺跡から出土している石錘のほとんどは打欠石錘であり、193のような切目石錘は珍しい。

197は頁岩を利用した扁平な打製石器である。技法的には8の打製石器につながるものがある。欠損しているが、もとの形は方形であったろうと思われる。縁の部分には両側から丁寧な加工を行つてゐる。扁平打製石斧のような土堀具ではなく、何か工具的なものに使つたと思われる。



44. 6号堅穴住居跡実測図(1/40)及び出土遺物実測図(1/3)



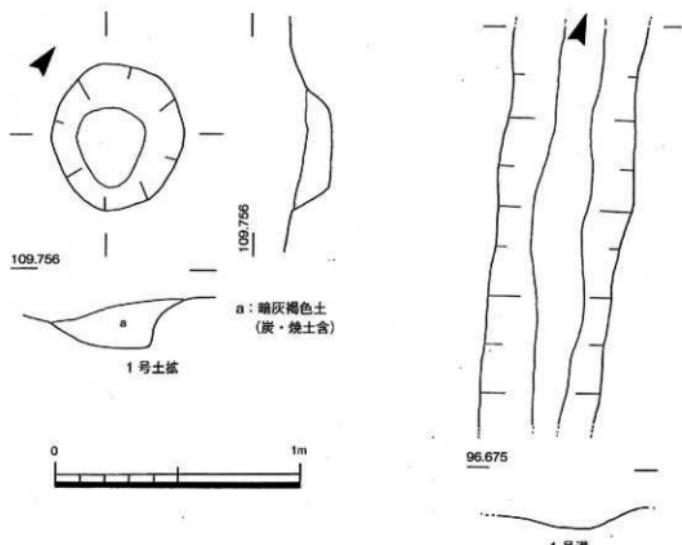
45. 土坑焼土集中部実測図 (1 / 20) 及び出土遺物実測図 (1 / 3)

198は断面が三角形と突帯が4条貼り付けられた土器である。弥生時代後期の中溝式土器ではないかと思われるが、この1点のみの出土であり詳細は不明である。

199は砂岩製の使用痕剥片である。剥片の2辺に鋸歯状の加工を施している。重量もある。

200は砂岩製の石核である。千枚質で粒も粗く、良質な剥片は取れなかったと思われる。

201は寛永通宝である。24区にある墓地の横の道から出土した。現在は、ほとんどの墓が累代墓として寄せられており、集骨の際、六道鏡の一部が埋土の中に紛れたものと思われる。



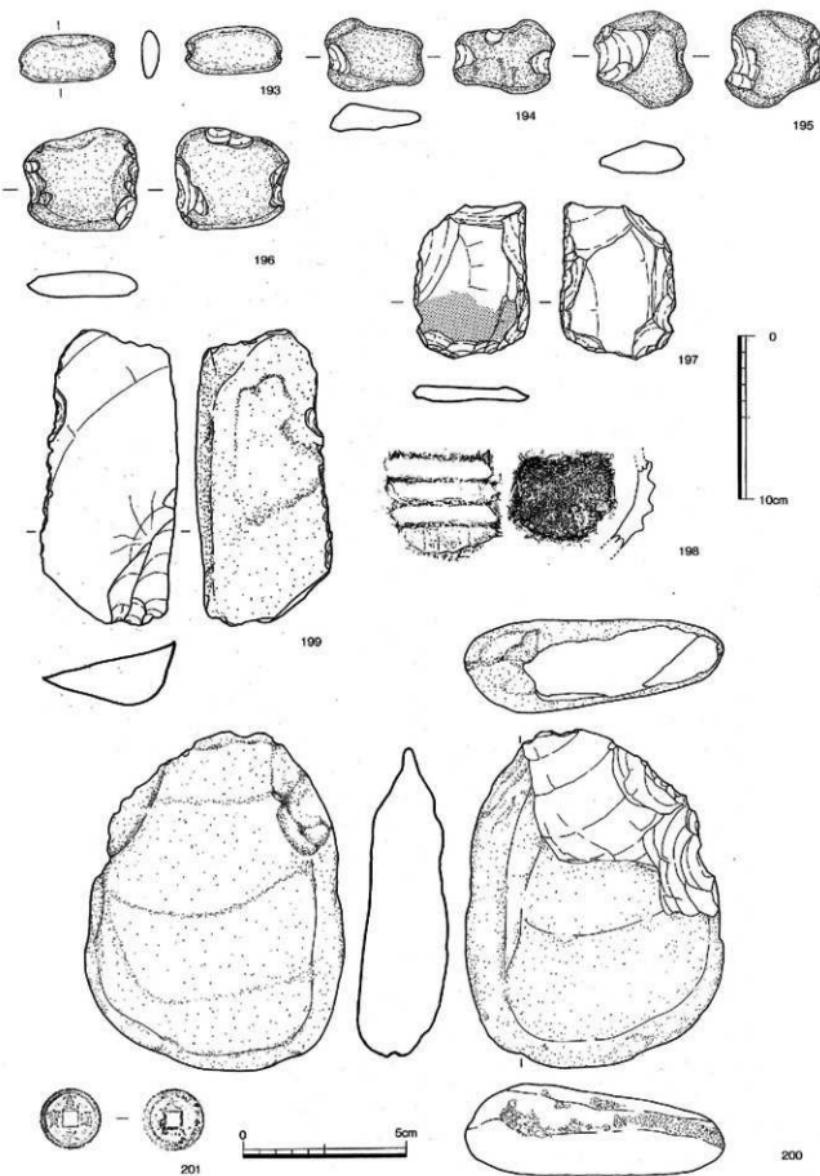
46. 1号土坑及び1号溝実測図 (1 / 20)



47. 道路遺構空中写真①



48. 道路遺構空中写真②



49. その他の遺物実測図 (1 / 3 · 2 / 3)

番号	出土地点	層	岩層(石材)・部位	文様・調節・色調等(外)	文様・調節・色調等(内)	最長 cm (断面)	最幅 cm (断面)	厚さ cm (断面)	重量 g (既成)	
1	13区	6	斜片実腹側 真岩			7.2	3.9	1.5	29.0	
2	表探		スクリュー型 砂岩	無文品 ホルンフェルス化 植生山火山岩類		3.5	3.1	0.9	9.0	
3.	1	便用施設部	便用施設部 流紋岩			7.1	4.0	0.9	22.5	
4.	土坑1		石器	チャート		1.7	1.3	0.2	0.4	
5.	土坑1		石器	チャート		8.1	3.9	1.6	70.0	
6.	土坑4		叩石 破片岩	阿蘇カルデ岩類 岩熱		9.9	5.8	3.8	255.0	
7.	土坑13		打製石斧 破片			9.7	5.9	2.0	172.5	
8.	土坑1		擾乱 打製石斧 千枚刃			6.6	8.5	0.5	34.8	
9.	土坑10		深鉢 口縁部	梅円形壓型文 ナメ 灰褐色	ナメ 噴出褐色				魚好	
10.	土坑10		深鉢 口縁部	梅円形壓型文 ナメ 灰褐色	ナメ にぶい黄褐色 風化				魚好	
11.	土坑10		深鉢 脚部	梅円形壓型文 灰褐色 スリ付唇	溶け込みナメ にぶい黄褐色				魚好	
12.	土坑10		深鉢 脚部	梅円形壓型文 黄褐色	溶け込みナメ 極茶褐色				良好	
13.	土坑8		深鉢 脚部	梅円形壓型文 黑褐色	風化 指押込みナメ にぶい黄褐色 スリ付唇				良好	
14.	土坑7		深鉢 脚部	梅円形壓型文 明歩脚	指押込み 明歩脚				良好	
15.	土坑7		深鉢 脚部	梅円形壓型文 黑褐色	ナメ 指印痕 黒赤褐色				良好	
16.	土坑13		深鉢 口縫部	無文系 手縫合 全体にスス	無文系 ナメ 灰褐色 全体にスス	28.0	1mm程度の粒子含む		良好	
17.	土坑4		打製石斧 破片	欠損 鋸齒面 自然面あり		8.5	6.2	1.6	64.4	
18.	土坑4		打製石斧 破片	欠損 鋸齒面あり		10.7	6.8	2.3	187.3	
19.	土坑4		深鉢 口縫部	ナメ にぶい手縫合 スリ付唇 比較的丸みナメ	ナメ 指印痕 赤褐色 スリ付唇				良好	
20.	土坑4		深鉢 脚部	ナメ一部剥離 黑褐色手縫合	ナメ にぶい明歩脚				良好	
21.	土坑7		打製石斧 破片	石縫合 欠損		9.5	4.4	2.3	105.7	
22.	6区		石縫合 チャート	先端部・脚部欠損		1.4	1.3	0.3	0.3	
23.	6区		石縫合 チャート	脚部欠損		1.5	1.9	0.4	0.5	
24.	14区1次	5	石縫合 チャート	先端部・脚部欠損		1.4	1.9	0.6	1.0	
25.	14区1次	5	石縫合 安山岩	無文品 植生山火山岩類		1.9	1.85	0.7	2.0	
26.	住居2		石縫合 チャート	脚部欠損		1.9	1.7	0.5	0.6	
27.	5区	3	石縫合 チャート	脚部欠損		1.8	1.4	0.6	0.6	
28.	住居2		石縫合 チャート	脚部欠損		1.8	1.6	0.4	0.5	
29.	住居2		石縫合 安山岩	無文品 植生山火山岩類?		2.3	2.0	0.4	1.0	
30.	表探		石縫合 流紋岩	無文品 植生山火山岩類		2.9	1.5	0.3	1.0	
31.	13区		石縫合 チャート			2.3	1.4	0.3	1.0	
32.	表探		石縫合 チャート	先端部欠損		3.1	1.3	0.2	1.2	
33.	14区2次		石縫合 ホルンフェルス	脚部欠損		3.2	2.1	0.5	2.0	
34.	14区1次		石縫合 チャート			3.4	2.0	3.8	3.0	
35.	千枚5		石縫合 チャート	脚部欠損		2.8	1.6	0.4	1.7	
36.	14区2次	5	スクリューバー チャート	脚面凹面あり 相接法		3.3	2.1	0.5	5.0	
37.	表探		石縫合 ?	セラミックアス	出間に瘤突あり 脚部欠損	3.8	2.1	0.4	5.6	
38.	表探		使用済み品 チャート	脚面凹面あり ノジールの一部?		3.3	3.2	1.0	7.9	
39.	13区	5	スクリューバー 直 真岩	直面面あり 打面が残る		6.25	4.8	1.25	46.0	
40.	表探		直 痕跡	痕跡あり		8.6	4.5	2.3	99.0	
41.	表探		石縫合 ホルンフェルス	自然面あり 端面に瘤突		11.5	3.3	1.1	50.0	
42.	表探		石斧 破片	自然面あり		13.6	5.7	1.7	149.0	
43.	表探		石斧 ホルンフェルス	原岩は瓦片 刃部周辺瘤突あり(刃部磨耗を伴う)		11.4	5.4	1.6	109.0	
44.	16区		撲滅 打製石斧 破片	一端欠損		14.8	7.1	1.3	156.0	
45.	14区1次		打製石斧 破片	一端欠損	自然面あり	9.0	4.4	1.5	77.5	
46.	14区1次		打製石斧 破片	一端欠損	自然面あり 破裂	11.7	5.0	1.5	102.5	
47.	14区1次		打製石斧 破片	一端欠損	自然面あり	7.5	4.1	1.2	47.5	
48.	表探		打製石斧 破片	自然面あり		9.6	6.8	3.1	317.0	
49.	表探		円形石器 緑色岩	自然面に瘤突あり 1/2環状	自然面あり	8.7	8.7	1.2	120.1	
50.	14区1次		石縫合 ホルンフェルス	原岩は瓦片 自然面あり 黒化強		11.2	7.9	1.7	479.0	
51.	表探		裸器 百合花	原岩山 自然面あり		11.5	8.6	3.2	432.0	
52.	14区1次	5	裸器 様式	原岩山 自然面あり		13.9	9.6	4.1	540.0	
53.	13区1次	5	裸器 様式	自然面あり 延長部に使用痕		10.2	3.5	1.5	398.0	
54.	16区		裸器 様式	自然面あり 截断部あり		11.2	8.0	5.4	500.0	
55.	表探		石斧 ホルンフェルス	自然面あり 表面凹面部は不規則		13.0	10.7	5.5	850.0	
56.	13区	5	石斧 ホルンフェルス	自然面あり 表面凹面部なし		10.1	9.2	5.8	566.0	
57.	表探		石斧 ホルンフェルス	自然面あり 表面凹面部あり		12.8	9.7	8.9	1016.0	
58.	表探		石斧 純真	自然面あり 打製作痕あり、平面を削りて剥離 内面はノジール		8.8	12.3	9.2	1170.0	
59.	13区	5	磨石 破片	一部空洞 密底あり		5.7	4.4	3.7	127.5	
60.	表探		磨石 破片	裏裏・両側面に磨擦あり 端部に削除あり		9.8	6.8	4.8	430.0	
61.	13区	5	磨石 破片	中一組面に磨擦あり 裏裏面ほん少々端部に削除あり		8.8	4.0	4.0	363.0	
62.	13区	5	磨石 破片	半分欠損 表裏面に磨擦あり 裏裏面ほん少々端部に削除あり		10.1	6.1	3.6	300.0	
63.	13区	5	磨石 破片	粗目山火山岩類 裏面のほん少々端部に削除あり 箱形による微細切削あり		8.8	8.6	3.8	389.0	
64.	表探		磨石 破片	表裏面に磨擦あり 破壊熱による微細切削あり		11.5	9.65	5.15	870.0	
65.	表探		石斧 破片	裏裏に擦痕あり 内部凹部あり		22.0	16.0	6.4	2150.0	
66.	16区		裸器 打製灰岩	阿蘇カルデ地盤堆積灰 妻裏面及び全周に鶴打痕あり		13.3	12.0	5.3	790.0	
67.	14区1次	5	裸器 口縁部	山形壓型文 口縁部ナメ 彩色	山形壓型文 白背景底面押打字 彩色				0.1~2mmの砂粒含む	
68.	14区1次	5	裸器 口縁部	山形壓型文 彩色	山形壓型文 彩色				0.1~3mmの砂粒含む	
69.	14区1次	5	裸器 口縁部	山形壓型文 唇面青色 スリ付唇	山形壓型文 唇面青色 ナメ にぶい黃褐色				魚好	
70.	13区	5	裸器 口縁部	山形壓型文 唇面青色	口縫山山形壓型文 彩色				0.1~3mmの砂粒含む	
71.	14区1次	5	裸器 口縁部	山形壓型文 彩色	ナメ 口縫山山形壓型文 彩色				魚好	

50. 土出土遺物観察表①

番号	出土地点	層	埋蔵(石材)・部位	文様・調査・色調等(外)	文様・調査・色調等(内)	最长 cm (高さ)	最长 cm (幅)	最长 cm (厚さ) (胎土)	重量 g (焼成)
72	14区2次	5	深鉢 口縁部	山形押型文 赤褐色	ナデ 口唇部山形押型文 に赤褐色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
73	14区2次	5	深鉢 口縁部	山形押型文 疎茶褐色 スリ行文	ナデ 口唇部山形押型文 疎茶褐色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
74	14区2次	5	深鉢 口縁部	山形押型文 疎茶褐色	山形押型文 褐色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
75	14区2次	5	深鉢 口縁部	山形押型文 に5行 黄褐色	山形押型文 に5行 黄褐色	4~16.0	2~20mm程の砂粒含む	良好	
76	14区2次	5	深鉢 底部	山形押型文 に5行 黄褐色	ナデ 基盤部	1~2mm程の砂粒含む	良好		
77	14区2次	5	深鉢 底部	山形押型文 に5行 黄褐色	ナデ に5行 黄褐色	1~2mm程の砂粒含む	良好		
78	14区2次	5	深鉢 底部	山形押型文 疎茶褐色	ナデ 疎茶褐色	1~2mm程の砂粒含む	良好		
79	13区	5	深鉢 底部	山形押型文 赤褐色	ナデ に5行 赤褐色	1~2mm程の砂粒含む	良好		
80	13区	5	深鉢 底部	山形押型文 赤褐色	ナデ に5行 赤褐色	0.3~3mm程の砂粒含む	良好		
81	17区	5	深鉢 底部	山形押型文 棕褐色	唐津文 ナデ 褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
82	14区1次	5	深鉢 底部	山形押型文 赤褐色	山形押型文 赤褐色 一部入文	1~2mm程の砂粒含む	良好		
83	14区1次	5	深鉢 底部	山形押型文 赤褐色	ナデ 褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
84	13区	5	深鉢 口縁部	横円内型文 に5行 黄褐色	ナデ 背面横円内型文 に5行 黄褐色	赤~17cm黄瓦合	良好		
85	13区	5	深鉢 口縁部	横円内型文 に5行 黄褐色	コロコロ横円内型文 ナデ 5行~赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
86	14区1次	5	深鉢 口縁部	横円内型文 に5行 黄褐色	指押文 ナデ に5行 黄褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
87	14区2次	5	深鉢 口縁部~胴部	横円内型文 疎茶褐色 スリ行文	山形押型文 5行~赤褐色 ナデ 5行~赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
88	13区	5	深鉢 口縁部	横円内型文 疎茶褐色	11号窯口山形押型文 ナデ に5行 黄褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
89	13区	5	深鉢 口縁部	横円内型文 赤褐色	山形押型文 引き締め 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
90	14区1次	5	深鉢 口縁部	横円内型文 赤褐色	指押文 ナデ 赤褐色	赤~17cm黄瓦合	良好		
91	14区1次	5	深鉢 口縁部	横円内型文 赤褐色	山形押型文 ナデ 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
92	14区1次	5	深鉢 底部	横円内型文 疎茶褐色	指押文 ナデ に5行 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
93	14区1次	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
94	14区1次	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 黒土色 一部赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
95	13区	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 黒土色 一部赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
96	14区1次	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 赤褐色 スリ行文	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
97	14区1次	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
98	13区	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
99	14区1次	5	深鉢 底部	横円内型文 赤褐色	ナデ 赤褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
100	14区2次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 茶色	ナデ 口唇部燃灰文 黄土~こげ茶	1~5mm程の砂粒含む	良好		
101	14区2次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 茶色	ナデ 口唇部燃灰文 茶色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
102	13区	5	深鉢 口縁部	燃灰文 茶色	ナデ 茶色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
103	13区	5	深鉢 口縁部	燃灰文 茶色	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
104	14区1次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
105	14区1次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
106	14区2次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
107	14区1次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
108	14区2次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	1~5mm程の砂粒含む	良好		
109	14区2次	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
110	13区	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
111	13区	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
112	13区	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
113	13区	5	深鉢 口縁部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
114	14区1次	5	深鉢 底部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
115	13区	5	深鉢 底部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
116	13区	5	深鉢 底部	燃灰文 3行灰	ナデ 口唇部燃灰文 黑褐色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
117	14区1次	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~3mm程の砂粒含む	やや良		
118	14区1次	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
119	14区2次	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
120	13区	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
121	11区	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~3mm程の砂粒含む	良好		
122	17区	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	1mm程の砂粒多し	良好		
123	6区	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	やや良		
124	13区	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
125	13区	5	深鉢 底部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
126	14区2次	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
127	23区	5	深鉢 口縁部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
128	14区1次	5	深鉢 底部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
129	14区1次	5	深鉢 底部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
130	14区1次	5	深鉢 底部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
131	13区	5	深鉢 底部	橘文 黑褐色	ナデ 黄土色 上部こげ茶 茶化	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
132	13区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
133	13区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
134	14区1次	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
135	14区2次	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
136	23区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
137	23区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
138	23区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
139	13区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
140	6区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
141	6区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
142	16区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		
143	16区	5	深鉢 底部~底部	ナデ 黄土色	ナデ 黄土色	0.1~5mm程の砂粒含む	良好		

51. 出上遺物観察表②

番号	出土場所	層	器種(石材)・部位	文様・彫刻・色調等(外)	文様・彫刻・色調等(内)	高さ cm (高さ)	幅 cm (幅)	奥行き cm (奥行き)	重さ g (成形)	
144	16区	櫻丸	口縁～頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黒系色	1.1	1~2mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
145	14区1次	櫻丸	口縁～頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.1	1~2mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
146	16区	櫻丸	口縁～頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
147	14区1次	桜丸	口縁～頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
148	16区	桜丸	底部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
149	14区1次	桜丸	底部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
150	底部	高杯	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
151	作円1	高杯	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
152	作円2	高杯	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
153	作円2	高杯	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
154	作円2	高杯	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
155	作円2	高杯	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
156	作円2	高杯	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
157	作円2	高杯	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
158	底部	高杯	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	0.9	0.1mm程度の砂粒含む	0.1~1mm程度の砂粒含む	43.0	
159	作円3	打製石斧	刃部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	10.1	5.9	1.1	80.7	
160	作円3	砾石	砂岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	13.2	6.2	2.5	23.0	
161	作円3	石礫	砂質頁岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	7.6	5.6	2.3	164.1	
162	作円4	石臼	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
163	作円4	石臼	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
164	作円4	石臼	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
165	作円4	石臼	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
166	作円4	石臼	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
167	作円4	石臼	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
168	作円4	石臼	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
169	作円4	石臼	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
170	作円4	石臼	底部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
171	作円4	石臼	底部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
172	作円4	石臼	底部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.20	—	—	—	
173	石臼	砾石	砂岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	7.8	6.5	2.8	145.8	
174	作円4	石臼	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	3.9	9.1	0.6	32.0	
175	作円4	石臼	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	8.7	5.5	5.5	45.0	
176	作円4	石臼	打製石斧	砂岩	ミガキ 黑系色	15.1	5.0	1.6	750.0	
177	作円4	石臼	砂引	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	15.6	3.8	4.2	436.0	
178	作円4	石臼	砂引	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	5.0	5.5	1.6	719.0	
179	作円4	石臼	砂引	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	8.9	3.8	0.7	92.6	
180	作円4	石臼	砂引	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	10.0	5.5	1.2	116.0	
181	作円4	石臼	砂引	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	8.9	9.3	1.1	136.0	
182	石臼	砾石	砂岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	27.6	8.5	2.4	752.0	
183	石臼	砾石	砂岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	25.2	1~2mm程度の砂粒含む	不規則	—	
184	作円5	底	口縁～側部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	13.0	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
185	作円5	底	口縁	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.7	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
186	作円5	底	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.7	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
187	作円5	底	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.7	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
188	作円5	底	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.7	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
189	作円6	底	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.7	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
190	作円6	底	頸部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	1.7	1~2mm程度の砂粒含む	良好	—	
191	土坑2	底	高部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	4.0	0.1~1mm程度の砂粒含む	良好	—	
192	土坑2	底	高部	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	5.6	0.1~1mm程度の砂粒含む	良好	—	
193	14区1次	3	石礫	砂岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	5.6	2.9	1.0	27.5
194	13区	3	石礫	波状岩	北洋文 玄武岩 墓石等複数枚 スス付着	ミガキ 黑系色	6.1	6.15	2.0	95.0
195	16区	1	一柄	石礫	ガラス状	6.2	6.9	1.5	110.0	
196	16区	1	一柄	石礫	砂岩	4.45	6.25	1.6	62.5	
197	23区	1	一柄	打製石斧	砂岩	9.4	7.0	0.9	80.0	
198	6区	1	一柄	石礫	玄武岩	5.6	2.9	1.0	27.5	
199	14区1次	1	一柄	石礫	玄武岩	18.0	8.4	2.9	482.0	
200	14区1次	1	一柄	石礫	砂岩	15.6	20.6	5.6	393.0	
201	24区	1	一柄	石礫	灰白色	2.4	0.15	2.5	—	

52. 出土遺物観察表③

III . おわりに

本年度までの県営農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財調査で検出された遺構は、縄文時代の早期の集石遺構 13 基・土坑 2 基、縄文時代晚期土坑 2 基、弥生・古墳時代の堅穴住居跡 6 軒・土坑 2 基・焼土集中部 2 ヶ所、時期不明の土坑 1 基、溝 1 基である。

また、近世（中世？）からごく最近まで利用されていた諸塚往還の一部を確認した。

遺物では、旧石器時代の剥片尖頭器・使用痕剥片・スクレイバー、縄文時代早期の石器・土器、弥生・古墳時代の石器・土器、寛永通宝などが出上している。

旧石器時代では、遺構の検出はなく、包含層からの出土遺物も少ない。工事の多くが包含層までに達しないため、大部分は保存される形となった。遺物のほとんどは、住居跡内及び埋土中から出土している。近接地域では、AT 層が確認され、さらにその下位の層から遺物の出土例が増えている。また、対岸の蔵田遺跡や矢野原遺跡などの堆積状況から、周辺には良好な埋蔵地が予想され、今後の開発行為には十分注意する必要がある。

縄文時代では、アカホヤ層下位より集石遺構や土坑が検出され、土器や石器が出土した。一部耕作等による削平が縄文時代早期面まで及んでおり、打製石斧、石核などが焼けた礫と一緒に烟の横に無造作に寄せられている。また、埋土中・攪乱部から重要な遺物の山上例も少なくない。周辺部では、連結土坑などの検出例もあり、埋土中あるいは寄せられた焼け石の量から考えると、周辺には、削平を免れた遺構がまだ多く残っていると予想される。

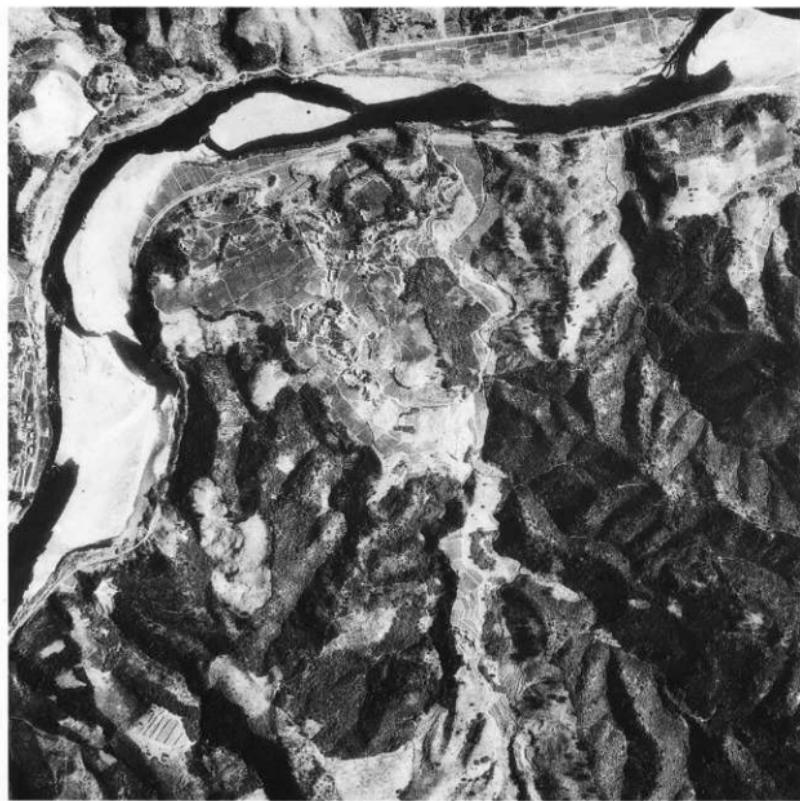
当地域における弥生・古墳時代の堅穴住居跡の検出例は、これまでの調査例に最近調査された延岡～北方道路の調査事例を加えると 50 例を超える。の中には、急傾斜地や尾根の端部などから検出された堅穴住居跡の調査例もあり、山間部における集落のあり方を考える上で興味深い。調査区の制限から、今回検出した堅穴住居跡の多くは一部分の調査にとどまった。今後、周辺の開発事業と調整しながら継続して調査を行える体制を構築したい。

諸塚往還の確認は、改めて「道」の重要性に対する認識を新たにすることができた。上崎地区は、台風に伴う増水により道路が寸断され、更には TR 高千穂鉄道の廃止により、買い物や通院等の住民生活や地区的特産品であるみかん・桃の出荷に大きな制約があった。農地保全整備事業は地域の社会経済基盤の強化に寄与し、上崎橋の架橋、更には予定されている延岡～北方道路の開通で更なる利便性が高まる期待されている。こうした中での歴史の中で埋もれた「諸塚往還」の再発見は、新たな地域づくりの『資源』を提供することになった。

これまで、上崎地区内において農地保全整備事業以外でも、様々な開発行為に先立って埋蔵文化財調査を行ってきた。文化財保護法をご理解いただき、開発事業者、工事関係者、行政当局、さらには地元の皆さんをはじめとする関係各位の協力に支えられて調査を行い、多くの成果を上げることができた。また、市民への雇用の場を提供することもでき、文化財保護と開発事業との調整を通じて、発掘調査や埋蔵文化財への理解も以前に比べて深まりつつある。

本書を通して、これからも埋蔵文化財事業に多くの方々のご支援とご協力をいただき、地域の歴史や文化に関する理解を深めるとともに、現代社会において求められている豊かな人間性の涵養を図る一端ともなれば幸いです。

また、事業年度等の制限から、多種多様な遺構・遺物について深く考察を行うことができなかつた。今後、機会を設けてその責を果たしたいと考えている。



53. 上嶺地区航空写真（昭和 23 年米軍撮影）



54. 事前健康指導の様子



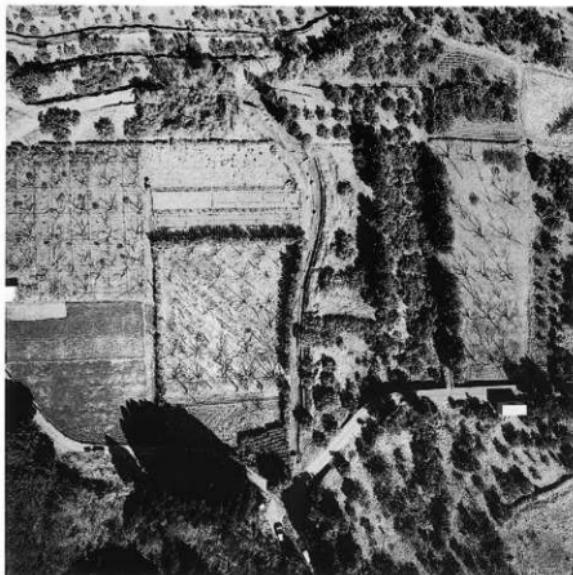
55. 中学生体験学習



56. 5区空中写真



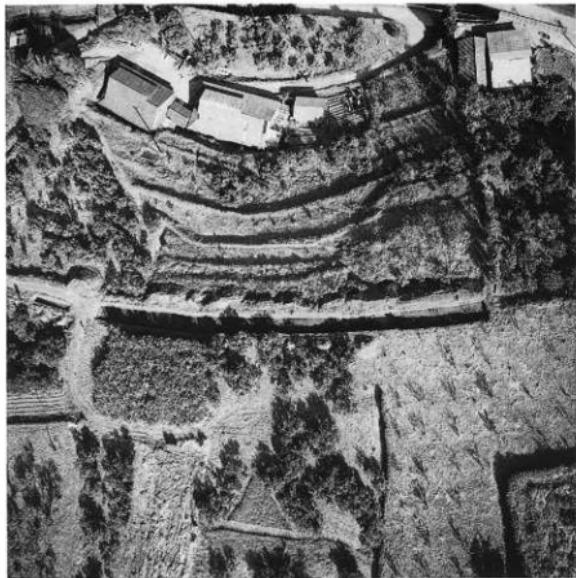
57. 11区空中写真



58. 13区空中写真



59. 14区空中写真



左) 60. 16 区空中写真

下) 61. 上崎地区空中写真
(北より)





62. 遺物出土状況（5 区・西より）



63. 遺物出土状況（11 区・北東より）



64. 遺物出土状況（14 区 1 次調査・南より）



65. 集石遺構検出状況（14 区 1 次調査・北より）



66. 集石遺構検出状況（14 区 2 次調査・西より）



67. 13 号集石遺構検出状況（16 区・西より）



68. 遺構検出状況（13区・東より）



69. 遺構検出状況（23区・東より）



70. 1号土坑検出状況（5区・南より）



71. 5号土坑検出状況（14区・北西より）



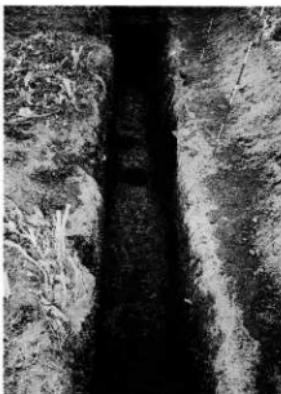
72. 7号土坑検出状況（23区・南東より）



73. 2号焼土集中部検出状況（11区・東より）



74. 2号堅穴住居跡状況（11区・東より）



75. 5号堅穴住居跡状況（17区・東より）



76. 4号堅穴住居跡状況（14区・東より）



77. 作業状況（14区1次調査・北東より）



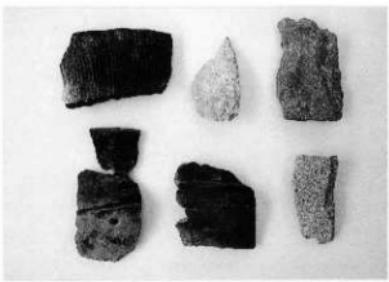
78. 諸塙往還検出状況（13区・北より）



79. 五ヶ瀬川河原 碓の堆積状況（南西より）



80. 出土遺物（1～15）



81. 出土遺物（16～21）



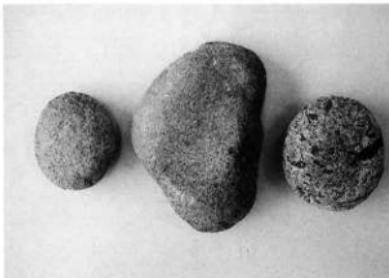
82. 出土遺物（22～43）



83. 出土遺物（44～54）



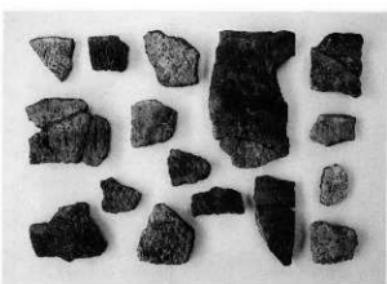
84. 出土遺物（55～63）



85. 出土遺物（64～66）



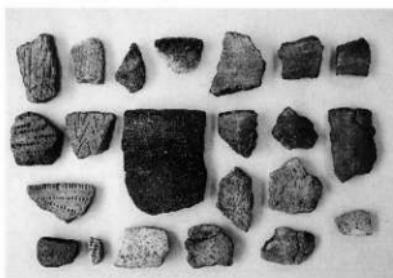
86. 出土遺物 (67 ~ 83)



87. 出土遺物 (84 ~ 99)



88. 出土遺物 (100 ~ 113)



89. 出土遺物 (114 ~ 135)



90. 出土遺物 (136 ~ 151)



91. 出土遺物 (152 ~ 158)



92. 出土遺物 (156)



93. 出土遺物 (159 ~ 169)



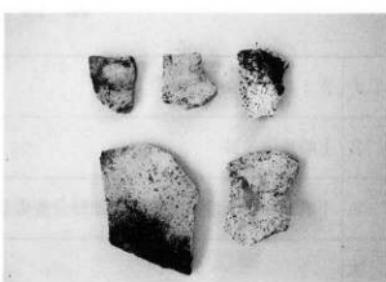
94. 出土遺物 (165 ~ 170 ~ 172)



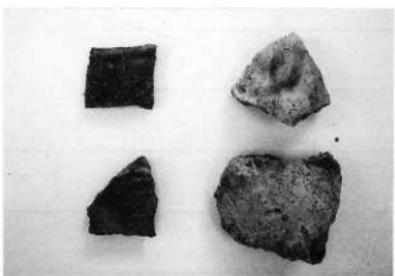
95. 出土遺物 (173 ~ 182)



96. 出土遺物 (183)



97. 出土遺物 (184 ~ 188)



98. 出土遺物 (189 ~ 192)



99. 出土遺物 (193 ~ 198)



100. 出土遺物 (199 ~ 200)



101. 土器復元狀況

報告書抄録

フリガナ	カミザキチクイセキ							
書名	上崎地区遺跡							
副書名	平成12~19年度上崎地区農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
著者名	小野 信彦							
編集機関	延岡市教育委員会							
所在地	宮崎県延岡市東本小路2-1							
発行年月日	平成20年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
カミザキ 上崎地区遺跡	ナベオカシ 延岡市 キタカタマチツウ 北方町辰	452033	33	32° 34' 18" 38"	131° 30' 15" 41"	2000.12.26 2008.2.15	7,010m ²	農地保全 整備事業 に伴う発掘 調査
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
包蔵地等	旧石器時代 縄文時代 弥生終末期～ 古墳時代初頭期 中・近世	集石遺構13基 竪穴住居跡6軒 土坑7基 焼土集中部 溝	土器・石器等	旧諸塚往還の一部を 検出				

上崎地区遺跡

延岡市文化財調査報告書

第 36 集

平成 20 年 3 月 31 日

発行：延岡市教育委員会

宮崎県延岡市東本小路 2 - 1

印刷：明巧堂印刷株式会社

宮崎県延岡市古川町 82 - 10